

エヴェンキの英雄叙事詩

「イルキスモンジャ勇者」

荻原眞子

エヴェンキについて

ユーラシアの特に、シベリアから極東地域にかけてもっとも広く分布する諸族の言語は分類上トウングース・満州語である。この言語グループにはエヴェンキ、エヴェンの他、アムール・サハリン地域のナーナイ、ウリチ、オロチ、ウデゲ、ネギダル、ウイルタ（オロッコ）、中国東北部のホジェン、オロチョン、満族、新疆省のシボなどの言語が含まれる。トウングース・満州語には起源的にモンゴル語やチュルク語系の諸語との共通性が認められているが、エヴェンキ語については地域によりヤクート語（ヤクーチャ）、ブリヤート語（バイカル湖地域）、サモデイ諸語（北西シベリア）からの借用が顕著である。エヴェンキ語の方言には北方言と南方言が区別されている。今日のエヴェンキ語の保有率は不明であるが、一般的にはロシア語をはじめ、以下に述べるように居住する地域の主要言語が使われている。

エヴェンキは西はオビ川流域から東は太平洋沿岸まで、南はバイカル湖周辺から北は北極海沿岸までの各地に広く居住し、その人口は全体で3万人（1989年、以下同じ）ほどである。主要な居住地はエニセイ川上、中流域のエヴェンキヤ地区（3,500人）、南シベリアのブリャーチヤ（1,700人）、東北シベリアのヤクーチャ（14,400人）、極東地域の他、中国東北部の興安嶺地域に（20,000人）、モンゴルである。ソ連の体制下では1930年代に集団経営が組織され、地域によりトナカイ牧畜、定住的な蔬菜栽培、農牧業を主とするコルホースやソホーズがつくられた。しかしながら、20世紀初頭までの生業はおおまかにはタイガ地帯でのトナカイ飼養・狩猟、森林ステップ地帯での農牧業、中国東北部での馬飼養・狩猟などが特徴的であり、古い文献で「トウングース」と呼ばれたこの民族では移動手段としてのトナカイや馬などの家畜をもたない狩猟をはじめとして、地域的に生業形態を異にし、多様性に富んでいることで知られていた。エヴェンキと言語上近縁なエヴェンはシベリアの北東部からオホーツク沿岸地域に居住し、その人口は約17,000人、古くから北部ではトナカイ牧畜、オホーツク沿岸地域では漁労や海獣狩猟などが行われた。アムール・サハリン地域の諸民族ではナーナイが約12,000人、ウリチが約3,200人、ウデゲが約1,900人を数え、他はいずれも千人未満の少数民族である。生業についてはアムール川流域では定住的な漁労（特に、サケマス漁）が大きな比重を占めるのに対し、沿海州の山岳地域のウデゲでは狩猟が、サハリンのウイルタではトナカイ飼育が顕著な特徴であった。中国東

北部、黒龍江省のホジェンは全体で約 4,300 人（1990）で、その生業は主としてウスリー川、松花江流域での漁労によって特徴づけられる。もちろん、どの民族にあっても 20 世紀を通じて、著しい社会文化的な変容があり、いわゆる「伝統的な生業」は多様な経済活動のなかでのもっとも突出した特徴についてであって、そのみで当該の民族文化が規定され得ないことは言うまでもない。

さて、エヴェンキの文化の特質については何よりも地域的な多様性が指摘されるが、その背景として、その居住地が異なる自然条件に富む広大な地域に涉っていること、同時に各地域で異なる民族との接触混淆があること、しかも、それが非常に古い時代からの狩猟民的な移動生活とかかわっていることなどが考えられる。一方、エヴェンキが帝政ロシアの植民地となり、毛皮税徴集の対象となるのは 17 世紀に入ってからのことであるが、このことも、シベリアの先住民社会全般に甚大な影響を及ぼした。それゆえ、エヴェンキの文化を一様に論ずることは難しい。しかしながら、典型的な例として、トナカイを飼育しながらタイガ地帯で狩猟を行ってきたグループでは、チュムという円錐形の天幕（シラカバ樹皮、皮張り）を住居として移動生活を送り、狩猟の獲物である鳥獣や魚、採集植物を食糧に、毛皮を衣料とし、什器にはシラカバ樹皮を多用、移動にはトナカイに騎乗したり橇として用い、河川では丸木舟やシラカバ樹皮張りの舟を利用した。季節的に数家族が離合集散したが、基本的には小集団でトナカイの餌となる苔などの植生や獲物の棲息状況に応じて住地を変えた。社会組織では父系的な外婚氏族（エニセイ川流域では <khalan>）が生業、狩猟儀礼、婚姻、葬儀、災害などの際や孤独な老人や孤児の救済に当って一定の機能を持っていた。エヴェンキではこのような氏族の名称が古くから非常に多く知られており、ソ連時代のはじめにも同一の氏族名をもつ人々は起源を共通にしているという意識をもっていたほどであり、それ以前にはその意識はもっと強かったものと推測される [Василевич 1969:151 ; 262-287]。このことは、後にみるように、英雄叙事詩の婚姻の在り方を理解する上でのヒントになる。

エヴェンキの世界観、信仰や儀礼にはおおまかにシャマニズム的な特徴と非シャマニズム的な特徴とを区別する見方がある。後者はむしろ古く、シャマニズム以前の段階に属するものと想定され、トゥングース諸族全般に共通して認められるのに対し、前者は地域的な特徴が多様であるとみられている [Василевич 1969: 210-250; 1971]。世界が上中下の三界から成るという構造はエヴェンキだけに固有ではないが、エヴェンキではこの三界が垂直に重なっているという世界観とは別に、この三界の配列が山頂の水源から河口までの川を軸にするというシャマン的な世界観がある。儀礼のなかでは獲物を祈願するシンケレヴン、イケニブケという呪術的な共同体の儀礼や日常的にセヴェキやヒンケンなどの木偶に食べ物を塗布する習俗、骨占い、熊送り、葬式などはシャマンが介在することなく行われ

た。シャマンは死者の靈魂を他界へ送る儀礼、病気の治療、死んだ幼児の靈魂をとり戻したり、家畜の疫病死に際してトナカイの靈魂を天界からもってくる儀礼、失せもの捜しや占いなどを行ったが、本質的にはシャマンはそれぞれ所属する氏族全体の利害に深くかかわっていた。17 世紀末からロシア正教の布教が進められ、部分的にはその影響が儀礼や口承文芸などに反映してはいるが、本質的にエヴェンキの精神文化を変容させるには至らなかった。

口承文芸について

エヴェンキの口承文芸のテキストは古くには 1775 年に I.ゲオルギがドイツ語で紹介したものがある[Georgi 1775: 288-295 (Василевич 1936: 233-235)]。それはバルグジン川流域のエヴェンキのもとで採録された説話で、ゲオルギは「主人公の名ドロダイ（山の主）とアルサラン・バクシから推して、モンゴルからの借用であろう」としているが、「エヴェンキの間では大変に流布していて、彼らはその歌と語りに興じている」と述べている[Василевич 1936: 233]。

ソ連時代になると、エヴェンキ研究の泰斗 G.M.ヴァシレヴィッチが北方諸民族大学のエヴェンキの学生たちからフォークロアを採録しはじめ、その後、シベリア各地や極東におけるフィールドワークを通じて資料収集を行った。『エヴェンキ（トゥングース）フォークロア資料』[Василевич 1936]はもっとも早い時機の資料集成で、これには 1925-1931 年に本人が収集した資料ばかりでなく、それ以前に公刊されたテキストがすべて収められており、重要な基礎資料となっている。その後、1935-1960 年のフィールドワークで集められた資料は『エヴェンキの歴史伝承』[Василевич 1966]に収録されている。また、M.G.ヴォスコポイニコフはバイカル湖地域のエヴェンキの言語や口承文芸の研究を行い、ロシア語で2つのテキスト集を著した[Воскобойников 1958: 1960]。この地域の説話には英雄の名前などにブリヤートの英雄叙事詩の影響がみられるという[Мырсева 1990: 73]。

1960 年代末からは言語学者であり、また、エヴェンキ語の話者でもある A.V. ロマノヴァと A.N.ムイレエヴァが言語学と口承文芸のフィールドワークと研究に携わるようになった。その成果が『ヤクーチヤエヴェンキのフォークロア』[Романова и Мырсева: 1971]、『エヴェンキの英雄叙事詩』[Эмельянов, Лебедева 1990]である。また、アムール川地域のエヴェンキの英雄叙事詩の断章が N.Ya.ブラートヴァによって採録、出版されている[Булатова 1987]

ジャンルについて

エヴェンキの口承文芸のジャンルについては、次のような分類がある[Василевич

1969:194-201]。

- 1) nimngakan (サハリンとアヤン川地域のエヴェンキでは nimkan) — これには神話、昔話、英雄叙事詩、氏族伝承、伝説が含まれる。(以下に改めて、詳述する。)
- 2) ulgur (字義は「話」) — 大人の日常生活での出来事についての世間話。すなわち、最近の過去に起った出来事についての話で、タイガ地帯に伝わっている。ヤクーチヤに住むエヴェンキには Tygyn というヤクートの英雄についての「オストリヤ」ostoriya (ロシア語の「歴史」istoriya に由来) がある。
- 3) iken, khagan (khan) — 主として、舞踊のリズムをとるための即興歌、短い決まった歌詞をもつ。かつては狩人・戦士の技競べの際に即興的に歌われたが、後には舞踊のためとなった。この歌の必要条件は一定の音節数のリフレインと長母音、短母音によって決まるリズムである。
davlavun — (モンゴル語からの借用。duulal=歌唱、duulakh=歌う)。翻訳された歌。全体にエヴェンキ的でない特徴をもっているが、その土地に固有の内容が加味され、遠くにまで普及している。例えば、オリョクマ川地域のエヴェンキの「ヤクートの歌」がオホーツク沿岸でも歌われ、「ブリヤートの歌」がザバイカル地方に広く流布し、また、ロシア人と接しているエヴェンキではチャストウーシュカに倣って歌がつくられている。
- 4) erivun — 補助霊を召集するためにシャマンが「叫ぶ」歌。ことばは解釈できない。リズムをとるために1語に2、3の音節が挿入される。
- 5) tagivka, nonovko — 謎など。一語からなる謎なぞと、フレーズからなる謎なぞがある。
- 6) odo~odekit (字義は「守護」)、ngelumu (字義は「恐怖」) — 呪文。エヴェンキはあらゆる呪文や禁止を「悪いこと」という。これには ア) 命令形+odo、イ) 条件+命令形、ウ) 平叙文で結末を説明する形式がある。
- 7) turechivke — 格言

ニムンガカンについて

上の分類では 1) ニムンガカンと 2) ウルグルが叙事詩のジャンルに当る。後者はモンゴルやブリヤートに同様のジャンルがあることを考えあわせ、また、その説話の内容から推して、前者とは起源的に異なる性格をもつものと考えられる。これに対して、前者のニムンガカンは類似の名称がトゥングース・満州語系の諸民族に一般的に認められる。すなわち、エヴェンでは「ニムカル」、アムール・サハリン地域の諸民族では、ウリチで「ニングマ」、オロチで「ニマプ、ニマ、ニマイプ」、ウイルタで「ニグマー」、ウデゲで「ニ

マンク」、ナーナイで「ニングマン」であり、また、中国東北部のホジェンでは「イマカン」である。これらの名称はエヴェンキのニムンガカン (nimngakan)と同様に非常に多様なジャンルの説話の総体に当てられている。エヴェンキのそれには、1)「神話、動物昔話、子供昔話、英雄叙事詩 (geroicheskie skazaniya)、氏族伝承」が含まれている[Василевич 1969: 198-201]。nimngakan の語義にはこの他に、2)「昔、伝統、時」の意があり、「それは昔のことだ」という場合である。さらに、3)「巫術をする」、「シャマンの儀式をする」の意がある[Василевич 1966: 7]。

このようにニムンガカンという語にはいくつかの意味があるが、ここではそのうちの英雄叙事詩について注目してみよう。

英雄叙事詩ニムンガカンの分布 英雄叙事詩はすべての地域のエヴェンキに流布しているのではなく、採録されているテキストは東部、すなわち、ヤクーチャ、アムール・サハリン地域とハバロフスク地方のエヴェンキのものである[Мыреева 1990: 72]。類似の叙事詩は、しばしば同じ英雄の名前とともにエヴェンにもみられ、また、エヴェンからユカギルに入っているものもある[Василевич 1966: 11-12]。(地図参照)

テキストの採録

* 比較的短いものが 13 篇『エヴェンキの歴史伝承』[Василевич1966]に収録されている。

原文[p.19-107]とロシア語訳[p.178-260]で、直接話法は韻文形式である。タイトルは以下のようなものである。

「コダクチョン」、「セカク」、「3 人の乙女」、「オタニ」、「モキグディン」(語り部

G.Edyan ; 1948 年採録 ; 場所 ウルミ川)

「コダクチョン」(語り部 S.Savin ; 1960 年採録 ; 場所 ウルミ川)

「ニヴォニンデ」(語り部 N.Arsenov(Edyan 氏族) ; 1948 年採録 ; 場所 アムダン川)

「フルゴチョン」(語り部 A.Pudov(Buta 氏族) ; 1947 年採録 ; 場所 アルゴマ川)

「ウムスニ」(語り部 M.Pikaleva(Edyan 氏族) ; 1948 年採録 ; 場所 ウルミ川)

「ウムスリコン」(語り部 S.Chepalov ; 1936 年採録 ; 場所 トウグル村)

「ウムン・ウムスニコン」(語り部 N.Fedorova ; 1936 年採録 ; 場所 チュミカン村)

「ガルパニカン」(語り部 G.Chinkov ; 1938 年採録 ; 場所 サハリン)

「ガルパス・マタ・ガルパヌチャン」(語り部 V.Diadorova(Mongo 氏族) ; 1948 年採録 ; 場所ウルミ川)

* 『ヤクーチャエヴェンキのフォークロア』[Romanova, Myreeva1971]に次の 3 篇がある。

「孤児ニュングルモク」(語り部 E.G.Trofimov ; 1908 年生、ハバロフスク州アイム村)
「勇者タムナニとジョロモ・ジョヌイカン」(語り部 S.V.Titov(Edyan 氏族) ; 1890 年生、
ハバロフスク州クルング・ウリャフ村)
「イルキスモンジャ勇者」(語り部 N.G.Trofimov(Buta 氏族) ; 1915-1971)

* 『エヴェンキの英雄叙事詩』 [Emel'yanov, Lebedeva 1990] に次の 2 篇がある[荻原 1997]。

「勇敢なるソダニ勇者」(語り部 N.G.Trofimov)

「絢爛たる刺繍衣の万能なるデヴェルチェン勇者」(語り部 N.G.Trofimov)

* この他にムイレエヴァによると未公開の資料が 10 篇あるという。いずれも 1965-87 年に A.N. ムイレエヴァ、A.V. ロマノーヴァを中心として採録されている。その語り部は年輩者(60-85 才)であるが、最近ではフォークロアに対する興味が薄れ、聴き手がないために語る機会がなくなっているという[Мырзева 1990: 77-78]。

語り部 本篇「イルキスモンジャ勇者」の語り部 N.G.トロフィーモフ(1915-1971)は英雄叙事詩の語り部の最後の一人であった。彼の師はエヴェンキの大氏族であるブタ氏族の語り部たちであるが、この氏族は 17 世紀の文書ではアルダン川中流域、18 世紀にはウダ川エヴェンキのなかに、19 世紀にはブレヤ川とセレムジャ川流域、サハリン、およびアヤンの近くで、20 世紀の 50 年代にはアルダン川支流、ウチュル川より下のアルダン川およびアヤン地区で確認されている。

トロフィーモフがはじめてニムンガカンを耳にしたのは 10 才のとき、語りは後に師となるアムールエヴェンキの S.ザボロツキー(ブタ氏族)であった。その折の「イルキスモンジャ勇者」は幾晩にもわたって語られた。それを 2 度目に聴いたとき、トロフィーモフはお気に入りの部分を繰り返して、3 度目にはザボロツキーの語りをそっくりなぞることができた。一年後には少年は皆の前でそれを歌っていた。ザボロツキーからは「中界のトルガンドウン」、「勇敢なるソダニ勇者」を覚えた。2 人目の師ウチュル川地域のエヴェンキ A.カレソフ(ブタ氏族)からは、「絢爛たる刺繍衣の万能なるデヴェルチェン勇者」、「ニュングルモク姫」を習得した。それは 13 才のときであった。トロフィーモフはそれを冬の夜に両親や、当時いっしょにウチュル川上流域を移動生活していた親類たちに語った。14 才になると、狩猟シーズンが終わってからエヴェンキが集まる大きな宿営地で、大勢の人々の前で歌った。

1930 年代にはヤクーチヤでは移動生活をしていたエヴェンキが狩猟組合(アルチェリ)に統合されるようになり、ニムンガカンを語る機会が一層増し、技に磨きがかかった[Мырзева 1990: 80]。

語りの場 トロフィーモフの話では、ニムンガカンの語りは夜、仕事や夕食の後に、語り部のところか、彼が客に行った先のチュム（天幕）であった。語り部は上座マルー（炉の奥、入り口の向かい側）の毛皮の敷物（クマラン）に座り、目を閉じてしばらく黙して精神を集中する。聴き手は静かにして、語り部の気が散らないようにしていなければならない。完全な静寂のなかで語り部は高揚した調子で導入部を歌いはじめ、次第に語りのテンポや声の強さを調節していく。

語りのスタイル 直接話法は歌われ、その他は語られるが、かつてはそれも詠唱であつたらしい。英雄叙事詩の語りは一人芝居である。優れた語り部は語るだけでなく、歌、身ぶり、顔の表情などすべての手段を尽くして、英雄のトナカイや馬も含め各々の登場者（ペルソーナ）を表現し、聴き手を説話の世界に引き込む。楽器による伴奏はない。

興にのった聴き手は間の手を入れる。「テデー！」（まったくだ!）、「ティケーン・トイ」（そうだ、そのとおりだ!）、「エロイ！」（なんだって!）、「ケッ!ケッ!」（さあ!さあ!）[Мырсева 1990: 81]、もしくは、「ヘッ、ヘッ」と囁いたり、「アユ!エベイ!」と無念の情を表したり、また、一方では、語り手が歌った英雄の直接話法が聴き手によって反復されることもあった[Василевич 1969:199; 斉藤 1988]。

語り部への対応 長い叙事詩が幾晩も歌われ、語り部が客人である場合、主人はトナカイを屠ってもてなさなければならなかった。聴き手も他の宿营地から来るときには、自分のトナカイを屠って持参する。これは語り部に対する最高の敬意を表す習慣であつた[Мырсева 1990: 81]。

ニムンガカンの構成

1) 語りはじめ＝導入部

- a) 説話で語られる出来事が大昔にあったということが伝えられる。
- b) 英雄が住むくにや場所の説明

2) 発端

- a) 不幸（妹の掠奪）の発生
- b) 英雄が世界を見たいと願望する（領域的な閉鎖の打開、遠隔の部族や民族との接触を求める）
- c) 英雄の嫁捜し

3) クライマックス

- a) 敵との闘い

b) 未来の花嫁の兄弟との闘い

4) 進展

a) 婚姻と祝宴

b) 新婚夫婦が夫の故郷へ帰還する。

語りはじめ＝導入部では創造神話が語られるが、これが叙事詩の伝統的なフォーミュラとなっている。最初に3つの世界（シビル）があったというが、中界と上界については比喩的に語られ、中界は「毛皮の敷物クマランほどの大きさに広がり、...」、上界は「天がシラカバ樹皮の箱の底ほどの大きさであった」のが、次第に増長し、果しなく大きくなったとする。また、ニムンガカンには非常に豊富なエヴェンキの民族誌的事実が投影されており、習俗、信仰、生業、住居、衣服、什器、武器などや、出産、誕生にかかわる習俗、シャマニズムなどについての詳細を見て取ることができる。

文体的特徴 ニムンガカンの文体的特徴として挙げられるのは語りはじめ、英雄の複雑な名、その個人的な歌い出し、行為の誇張、枕詞、叙事詩的フォーミュラ、比喩、頭韻、脚韻などである。全体として、その文体は非常に豊かな創造的なことばの世界を創出している。

特に、歌い出し=ikevke についてみるなら、これに類するリフレインは英雄叙事詩だけの特徴ではなく、神話やシャマンの歌にも共通しており [Василевич 1936: 141-142]、また、即興歌や輪舞の歌でも一般的である。輪舞の場合はトゥングース諸族ばかりでなく、他の民族（例えば、ヤクート）でも認められる。エヴェンキでは地域によって輪舞のリフレインが異なっている[Мырсева 1990: 85]。

英雄叙事詩では登場者が各々の歌い出しをもっており、これは直接話法の科白のまず冒頭で歌われ、それによって歌い手が誰であるかが明らかになる。また、科白の途中で繰り返されたり、最後にも繰り返されて締めくくりとなる場合もある。この歌い出しやリフレインの文句の意味は不祥である（具体例は解説を参照）。あるものは氏族名に由来するという解釈もあるが[Василевич 1966: 12-13]、すべての歌い出しをそれで説明できるわけではない。また、いくつかの歌い出しはどの叙事詩でも使われている。例えば、勇者の「ギロ・ギロ、ギロカニン!」、ヒロインの「キメ・キメ、キメニン!」、地下界のアヴァヒの「ラヴィル・ラヴィル、ラヴィルドン!」はどのテキストにも共通して認められ、また、同じ歌い出しやリフレインが複数の登場人物によって使われる例もある[Мырсева 1990: 85]。

語り部は各登場人物や動物などに固有の歌い出しとメロディーを声音を変えながら歌い分け、地の詩に織りまぜながら語り進む。

イルキスモンジャ勇者

出典

Романова А.В. и Мырсева А.Н.: “Иркисмондя-богатырь”, *Фольклор эвенков Якутии*. Л. р.99-306

あらすじ

昔々、三つのシビルの大地が生まれた。やがて、この真ん中の大地は広大になり、比ぶべきものがないほど美しくなった。あるチュムに二人の若者が暮っていた。弟は中の世界の若き勇者イルキスモンジャ、兄は聾啞で、鍛冶屋のトロンタイである。

あるとき、大きな叫び声がある。イルキスモンジャがチュムに飛び込むと、鍛冶屋のトロンタイが人さし指を傷め、血が泉のように迸り出ている。イルキスモンジャは傷の手当てをして、火に雄トナカイの脂身を捧げる。鍛冶屋のトロンタイは死なずに三日間眠る。

四日目の夜明けに嵐とともに三羽の鳥が舞い降りてきて、次のように歌う。「昔々、ゲヴァン翁の娘クックマチャン美女と結婚した勇者があった。三年の後、彼はゲヴァン翁の息子、鍛冶屋のトロンタイを攫って海上の島に逃げた。私はクックマチャン、真ん中の妹はダルベク美女、末の妹はセカク美女。とうとう、恥じ知らずの盗人を見つけたというもの。」イルキスモンジャは、記憶を辿って「確かに、彼女は私の妻だった」と思い出し、妻たちをもてなす。

三日後にクックマチャンは「息子チャギルガンに会いたくはないか。兄は私が連れ帰る」と言って、彼女は鍛冶屋のトロンタイと共に白鳥に変じて飛立つ。イルキスモンジャは銀ヅルになって後を追う。

三人はゲヴァン翁の住むところへ着く。息子が出迎える。イルキスモンジャは息子が子供ながら申し分のない勇者振りであることを認める。イルキスモンジャ、トロンタイ、息子が食事をしていると、にわかに荒天になり、二羽の鳥が舞い降りる。人間の姿になった一人が「我は上界の、太陽の息子、デルゲルデイン」と名乗り、戸口に恐ろしいアヴァヒがいると告げる。イルキスモンジャが出てみると、地下界のアヴァヒ、ホロン・デヴィルと地下界の女主人であるその姉、針金の髪のパバヤガが、「弟には家族が必要だ、セカク姫をもらいにきた」という。これに怒ったイルキスモンジャはこの女の耳もとを拳で突き、かくて両者は格闘をはじめる。太陽の息子デルゲルデインはホロン・デヴィルと闘う。三日か、三十昼夜か闘いはつづき、やがてデルゲルデインはホロン・デヴィルを殺す。ホロン・デヴィルは辞世で姉のアヴァヒを責める。

地下界の女アヴァヒは狡猾な手段でイルキスモンジャを攻め、弱り果てたイルキスモンジャは鍛冶屋のトロンタイに助けを求める。駆せ参じたトロンタイがその 99 ブードの槌を振り下ろすと、それは女アヴァヒでなく、イルキスモンジャの頭を打ち砕き、勇者は死

ぬ。

そこへ息子のチャギルガンが駆けつけてババヤガに挑む。彼女は鉄の髪と鉄の爪でチャギルガンの肉体を苛み、弱りはてた彼は最期に臨み、太陽の息子デルゲルデインに救いを求める。やってきたデルゲルデインとチャギルガンをババヤガは 33 サージェンの髪の毛でがんじがらめにして海上の島に連れ去る。

孤島に幽閉され死を待っている二人のところへセカク姫が鳥となって飛来し、そこから救出して、「二人の留守の間、クックマチャンに三界に勇名を馳せる息子が生まれた」ことを告げ、自分たちで帰郷するようにという。

その後、セカク姫は地下界のアヴァヒの頭目、セレルグン・セヴェンジャに三年も追われて疲労困憊し、妹のダルペク美女に救いを求め、自分は一本の髪の毛の煙に紛れて家に入る。代わってダルペク美女が白い鳥になって飛び出すと、アヴァヒの頭目は驚となってその後を追う。チャギルガンとデルゲルデインの勇者二人はようやく家に辿りつく。セカク姫はカラスに生命の水を頼み、それで二人を回復させる。

一方、クックマチャンはイルキスモンジャの骨を集め、関節をつなぎ合わせ、銅の揺りかごに入れて、シャマンの詞をかけて蘇生させる。

アヴァヒの頭目に追われていたダルペク美女はついに、力尽き、その犠牲になる。そこへ幼いチャギルガンが馳せ参じ、アヴァヒと対決するが、力及ばず、いよいよ最期に臨み、太陽の息子のデルゲルデインに救援を求める。彼もアヴァヒに叶わず、策尽きて、クックマチャンに「三界に名の聞こえたココルドコンを寄こしてはくれまいか」と頼む。彼女は幼子の息子を遣る。彼はゲヴァン翁の 110 プードの鑄鉄のボールをもって、アヴァヒに向かい、これを滅ぼす。太陽の息子のデルゲルデインがセカク姫に求婚し、めでたく祝宴がはじまる。

ココルドコンは嫁を求めて遍歴に出立し、天上界の天の息子デュギルマンジャの許に至って、その娘インモコン姫に求婚にきたことを告げる。デュギルマンジャは天上界の外れでアルバガイカン嬪の二人の息子が地下界から闖入してきたアヴァヒと闘っていることを話し、ココルドコンと共に助太刀に赴く。デュギルマンジャとアヴァヒの闘いは続き、天地は揺ぎ、大地は荒廃する。大地の母霊シメムシン嬪はこの両者を罰して、地の中に封じ込める。ココルドコンがデュギルマンジャのくにへ一人で帰ると、インモコン姫が地下界からやってきたアヴァヒと一人闘っている。ココルドコンは代わってその相手をして、滅ぼす。

次いで、またしても、地下界から二人のアヴァヒ、勇者とババヤガが現れ、インモコン姫へ求婚する。ココルドコンがこのアヴァヒを滅ぼす。デュギルマンジャが封じ込められていた地下から帰還し、雀ほどの大きさのココルドコンに技比べを申し出る。後者が勝ち、

本当の姿を露わすとデュギルマンジャは彼が真の勇者であることに満足し娘との結婚に同意して、祝宴になる。ココルドコンは晴れて、インモコン姫を嫁にして帰郷し、そこでも婚礼の祝宴が催される。

太陽の息子デルゲルデインを父に、セカク姫を母にもつ上界のフルコクチョンが花嫁捜しの遍歴に出かける。天上界に達すると、人さし指で相手を倒すというウニャントウク姫の兄たち三人が挑んで来て、闘いになる。三人を倒し、最後にウニャントウク姫を相手に闘い、彼女を滅ぼすが、瀕死の姫を見て、フルコクチョンは我に返り、女シャマンに救済を懇願する。蘇生した姫を嫁に帰還すると、セカク姫が婚礼の準備をする。

中界のフルコクチョンが花嫁を求めて遠征にでる。天上界に達し、シャマンのアヤクチャンへの求婚を告げると、その父親は地下界のアヴァヒがきて娘の兄二人と闘い、二人が敗れたあと、彼女がアヴァヒと闘っているという。フルコクチョンはアヴァヒの頭目アイダル勇者と闘う。闘いの場が地下界に移され、フルコクチョンは窮地に陥るが、シャマンのアヤクチャンの助力で、鍛冶屋のトロンタイの槌とやっこを天上から降ろしてもらい、それで危機を脱し、アヴァヒを滅ぼす。フルコクチョンとアヤクチャンはさらに、地下界の中央に達して、生命の水を自分たち一族のために入手し、彼女の両親の許へ帰り、母親の祝福を受ける。

二人は中界へ帰るが、アヤクチャンは兄のタムナル勇者の骨をたずさえ、途中でこの兄を蘇生させてデリスという名を与える。三人は中の世界へ帰還する。デリスは太陽の息子デルゲルデインの娘デルゴクチョンに求婚する。デリスは婿としての資格を示す難題を見事にこなし、彼女との結婚の祝福を受ける。

ココルドコンの娘、中界のソルコクチョンは年頃になり、毎夜、競技場で鍛練をしている。ある時、天上界から銀づくめのモングンドル勇者が降下し、ココルドコンに求婚する。イルキスモンジャの一族全員のいるところで、天界から落ちてきて競技場に刺さった矢には二人の生き姿が映し出されていた。かくて、婚礼は 22 昼夜におよび、競技が行われ、中界のフルコクチョン、天上界のモングンドル勇者、絹衣のソルコクチョンに適うものは誰もいなかった。それ以来、我らが真ん中の大地は今日にいたるまで平和である。

梗概（原文は段落がないため、便宜的に訳者が番号と小見出しを付した。）

1. エピローグ

昔々、三つのシビル¹⁾の大地が生れた。この大地はトナカイの鞍敷ほどの大きさと、そこには川床が 99 方向に走り、山々は黒狐の 9 列に分かれた濃い毛のように聳えていた。草は萎えることがなかった。しばらくすると、この真ん中の大地は広大になり、翼ある鳥は巡ることができなくなった。それはそれは比ぶべきものない麗しいくにであった。こ

のくにはモミ、カラムツ、マツ、シラカバが生え、走り廻る獣と人々がいた。南の斜面には数多のオオジカの雄が、山の森には数多のトナカイの雄が、大地の外れにはウサギが、小川の岸边には数多のリスが動き廻っていた。

この美しいくにに二本足のウランカイ²⁾が暮していなかろうはずはない。このくにのあるチュム（天幕）に二人の若者がくらしていた。トナカイも馬も犬も友もなく、たった二人だけで暮していた。何を食べていたかと言えば、弟は俊足の勇者だったので、四つ足の獣は何一つ逃さなかった。これこそ、真ん中の世界で誉れ高い、その名もイルキスモンジャ、若き勇者である。年上のほうは、家から一步も外へ出たことがなく、右手に 77 プードの槌、左手に 33 プード³⁾のやっここを持つ者、その名は 3 才にしてやっここ、4 才にして槌をものにした鍛冶屋のトロンタイ。ある朝、イルキスモンジャがトナカイの皮剥ぎをしていると、大きな叫び声がする。チュムで鍛冶屋のトロンタイが人さし指を傷め、血が泉のように迸り出ている。イルキスモンジャは「デイングドニ・デイングドニ、デレゴイ！ 鍛冶屋のトロンタイ、兄よ、どうした。昔の賢人は『鍛冶屋は間近を打たぬもの』と言った。何か目に見えないアヴァヒがあなたを過たせ、私から良き友を亡くそうとしてか。あなたは年寄りだが、久しく炉に敬うべき獣の脂を捧げてはおらぬ。もしやして、それ故に過たれたのか」と言って、トナカイの肉をとりて天幕の敷居を蹴って出た。

鍛冶屋のトロンタイの血は敷居を越え、川のように流れた。イルキスモンジャは雄トナカイの脂肪を四切れ切りとって、炉の火をもてなし、トロンタイの指を雄トナカイの真皮で縛った。こうして鍛冶屋のトロンタイは死なずに三日間眠った。

2. イルキスモンジャ勇者の巻

四日目の夜明け、四方から風が吹き、黒雲が湧き起り、白雲現れ、あっという間に強風が吹き荒れ、雷鳴と稲妻が走って天を轟かし、地を鳴動した。稲妻は真にチュムを木っ端微塵にせんとし、豪雨が降り注ぎ、雪がしんしんと降りしきった。風雨が止んだとき、三羽の鳥がカッコウのように尾をふりながら舞い降り、そのうちの一羽が言った。

「キドウ・キドウ、キドゥヤル！ 中界のイルキスモンジャよ、扉をあけて、聞けよかし。『妾がどこの生れか』と問うなら、昔々、ゲヴァン翁の娘クックマチャンと結婚した勇者（マタ）があった。三年連れ添ったが、その勇者はゲヴァン翁の息子、鍛冶屋のトロンタイを攫って海上の島へ逃げた。私の名はクックマチャン、真ん中の妹はダルペク姫、末の妹はセカク姫。中界のイルキスモンジャよ、何があったというのか。お前さんの声は三つのシビルの地の隅々に響き、とうとう、恥知らずの盗人を見つけたというもの。さあ、遠くからやってきた私たちに何かを食べさせておくれ。」

クックマチャンは「キドウ・キドウ、キドゥヤル！ 妹たちよ、すぐさま家に帰り、息

子に『父親を見つけた。中界のイルキスモンジャを。三日後に母と帰る』と伝えよ」という。妹たちは三度回って白い鳥となり、飛び去った。三日後にクックマチャンは夫と兄に向かって告げる。「息子に会いたくはないか。名を何と呼び、何の誉れある者か、知りたくはないか。両耳持つ者のうちでもっとも敏感、両目を持つ者のうちでもっとも炯眼なる者、トゴコモ・チャギルガンとは彼の名なり。」

クックマチャンは外へ出て、三回巡って白鳥になって飛び上がる。トロンタイは三回廻ってツルに化し、片方の爪足に 77 プードの槌を、もう一方に 33 プードのやっこを掴んで飛び立つ。イルキスモンジャは 3 回廻って銀ツルになり後を追う。三羽は第八天の端、第九天の下に達した。どれほど飛んだことか、夏は雨で、秋は霰で、冬は雪で、春はわた雪でそれと知った。

ゲヴァン翁の住むところへ近づいた。イルキスモンジャがシラカバの林と思ったのは、白い去勢トナカイの群、サルヤナギの茂みと思ったものは生まれたばかりのトナカイの群、石と思ったものは雌牛の群、切株は馬の群だった。彼らは降り立って人の姿になり、16 面体の木造りの家に着いた。イルキスモンジャは告げる。「デイングドニ・デイングドニ、デレゴイ！ゲヴァン翁の娘たちよ、扉を開けよ、我は中界のイルキスモンジャ。」すると、家の中から、強きマタの声が響く。「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！口を開いたあの方は何者ぞ。彼の人の胸は何と大きいことか！これほどの大声を私は夢でも聞いたことがない。私を行かせてください。」

息子は出てきて、父と叔父を迎える。イルキスモンジャは息子を眺め、真の勇者振りを認める。その間に女たちは三頭の肥った牡牛を屠り、煮て卓に置いた。息子は幼児ながら黒い肉は黒エゾヤマドリの大きさを口に入れ、黒ライチョウの大きさになると吞込み、脂肪はウサギほどの大きさのものを口に入れ、シャコの大きさになると吞込み、海綿状の骨は肉と食らい、脚の骨は口の端で折り、煮汁は 77 プードの鍋から飲み干した。

3. 太陽の息子デルゲルデイン勇者の巻

三人が食事をしていると、突如として黒雲、白雲、赤雲が湧き、たちまち荒天になると、やがて、戸口に二羽の鳥が騒々しく舞い降り、人間になると、一人が言う。「ギネ・ギネ、ギネカニン！我は天上界の住人、優れたる氏族の、誉れあるマタ、銀装束の勇者、太陽の息子、名をデルゲルデインと言う。何用で来たかと問われば、『汝の大いなる誉れと高き名の故にやってきたのだが、戸口にいる隻眼、隻手、隻脚の夢にも現にも聞いたことも見たこともない、人間なのか、アヴァヒなのか』が恐ろしい。」

それを聞くと、イルキスモンジャは外へ出る。一目見るなり、イルキスモンジャは怒りが全身にみなぎる。「何者か。」「デヴィルーデヴィル、デヴィリエ、我は地下界のアヴァ

ヒ⁴の頭目、我はわが意志にあらず、姉の力づくで連れ来られた。汝の義妹のセカク姫を求めにきた。我が名はホロン・デヴィル、姉の名は 33 サージェンの針金の髪をもつ地下界のアヴァヒの女主人ババヤガ。」姉が鉄の櫛で針金の髪を梳いて、言う。「ラヴィル・ラヴィル、ラヴィルドン！弟には家族が必要だ。セカク姫を嫁にもらいにきた。」

「デイングドニ・デイングドニ、デレゴイ！地下界のアヴァヒの女主人よ、いつからどのように尊大になったか。アヴァヒが中界の娘と結婚して子をなし、家畜を飼ったなどという話を聞いた試しがあるか。私の血が流れ、硬い骨が折れ、厚い皮膚が裂けて死ぬまでは、おとなしく渡しはしない、お前の身体が壊れ、鉄の骨が錆びないうちに、さっさと失せろ。」そう言うと、イルキスモンジャは女の耳元を拳で突いた。女は三回転がると、格闘がはじまった。枯れ木は木っ端微塵、生木の皮や枝は裂け、小山は均されて平になり、窪みは足で崩れ、氷の融けかかった地面には腰まで埋まり、堅い地面には膝まで沈んで打ち合った。殴りあう音は天にこだまし、蹴りあう音は地に響いた。

その間にホロン・デヴィルは太陽の息子デルゲルデインを煽動し、両者は闘いをはじめ。四人の勇者が闘い合い、ともに互角であったが、やがてホロン・デヴィルは弱り、意識朦朧となるや、デルゲルデインは彼を担ぎあげ7尋向こうへ投げ飛ばし、刃渡り4指尺のナイフでその頸をきる。アヴァヒが辞世を言わずに死ねようか。「デヴィル・デヴィル、デヴィリエ！くにに在るとき、誰か私に勝てる者があるとは思わなかったが、我より強き者がここに在る。だが、咎むべき罪あるは我が姉。我は妹と結婚しようとしたが、姉が無理矢理ここへ私を誘ったのだ。彼女を我と同じ運命に遭わせよ。」

太陽の息子が家へ戻ると、内でチャギルガンがセカク姫の押し止めようとする手からもがき逃れようとする様子。セカク姫が言う。「キモ・キモ、キモニン！お前の父、中界のイルキスモンジャは強く手強い。負けたりはしない。上界の勇者、太陽の息子のデルゲルデインはとっくにホロン・デヴィルを殺した。何の心配することがあろうや。お前はまだ幼い。いずれ闘うときが来よう。」

そのとき、イルキスモンジャとアヴァヒの女頭目ババヤガの闘いは丸1年になった。ババヤガの闘い振りは卑怯で狡猾であった。イルキスモンジャの広い背中が狭まり、長い思考は縮まり、死期が迫った。そのとき、イルキスモンジャの詞が家に入ろうとするデルゲルデイン勇者に風で運ばれてきた。「デイングドニ・デイングドニ、デレゴイ！嘆かわしきこと、我が不運よ、息をするのも苦しい。ババヤガは狡智もて我にこの世を棄てさせようとしている。鍛冶屋のトロンタイよ、お前は耳は聞こえず、口もきけないが、よく聴いて、助けにきてくれ。」

鍛冶屋のトロンタイは聞こえたのか、察したのか、鋭い叫び声をあげ、77 ブードの槌をつかんで、闘う者たちのところへきた。その槌を振りかざして、ババヤガに打ち下したが、

彼女がそれを反らしたので、槌はイルキスモンジャの頭を打碎いた。それから、鍛冶屋のトロンタイはババヤガと格闘をはじめた。このとき、眼に火をもつチャギルガンが八重の錠のかかった扉を蹴やぶって外へ飛びだした。外では父はすでに死んでいた。

「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！鍛冶屋のトロンタイ、我が叔父よ、我はイルキスモンジャの息子、眼に火をもつチャギルガン。ババヤガと我が運を試そう。赤いサルヤナギもて、互いの背骨を打ち合おう。何の咎ゆえに奴女は中界のイルキスモンジャを辱めたか。」若き勇者はババヤガと拳固で闘い、その音は天を轟かせ、足音は地にこえました。ババヤガは 33 尋の針金の髪でチャギルガンの両手、両足をからめ、鉄の爪でその健やかな肉体を苛む。若き勇者は弱り、敗北のときがくる。チャギルガンはデルゲルデインに詞を送る。「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！天界の勇者、太陽の息子、デルゲルデイン、ババヤガは強者にはあらねど、狡猾なり。とく来て、助けたまえ。二人して闘おう。33 尋の髪の毛は禍ものなり。手足に触れるや、身体に食い込む。とく来て、我が魂を助けたまえ。」

デルゲルデインはやってくると、ババヤガに一撃をくらわす。ババヤガは三回転がったが、臆する気色も見せず、二人を相手に闘うが、やがて、彼ら二人を 33 尋の髪の毛でがらんじがらめにすると、日没の方角へ引きずっていく。「ラヴィル・ラヴィル、ラヴィルドン！中界のイルキスモンジャを父に、クックマチャン美女を母にもつチャギルガンよ、お前はまだ子供、くにがまだ近いうちに帰るがよい、今帰らねば、堪え難き苦痛に遭おう、たとえ、生きているにしろ、二度とくには戻れぬところへお前を投棄てる。太陽の息子よ、妾と競うならくるがよい。妾の靴の敷草を乾かし、水汲みや薪割りをやってもらおう。妾は予め話した。行くのはお前たちの勝手だ。」

それを聞くと、我らが勇者は一層憤り、怯むことなくババヤガを追った。三月か三年か、ババヤガが如何に彼らを連れ去ったかは定かでない。「大地を行く」と言えども、踵は地につかず、「空を飛ぶ」といえども、翼はない。が、速やかに、巧妙にババヤガは彼らを連れ去った。

気がつくと、海上の島にいる。互いに眺めやると、衣はすっかり破け、身体には生きた箇所なく、手袋や帽子のわずかな破片が残るのみ。二人は一所でじっと死を待つことを潔しとせず、せめて少しでもと帰り道をたどるが、やがて険しい崖に阻まれ、そこで目を閉じている。すると、幽かに上方から声がする。

「キモ・キモ、キモニン！何と遠いことか、もしやして、ババヤガが我が哀れな甥、眼に火をもつチャギルガンの爪一つでも海の岩に投げ捨てておいてくれれば、、、せめて骨なりでも見つかるものなら、二人をこのアヴァヒの地に棄ておきはしないものを。」それを聞くと、チャギルガンは言った。「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！我が叔母、

ゲヴァン翁の娘、セカク姫、我々には骨と皮と息しかのこってはいない。敵を殺していたなら、死ぬことは嘆かわしくはないものを。」セカク姫は何度か回転して人の姿になり、77 尋の絹の髪の毛に二つの赤い卵を結びつけて、降ろす。「キモ・キモ、キモニン！この卵を食べて、私の髪の毛の先につかまりなさい。」二人が卵を食べると、視野が少し明るみ、背は幽かに広がり、意識が鮮明になった。二人が乙女の髪の毛を三回軀に巻つけると、セカク姫は彼らを崖の上に引き上げた。

「キモ・キモ、キモニン！くにまでは遠い。地を跳ねる四つ足の獣は三回生まれ替わってようやく辿りつき、翼ある鳥は三回卵を孵して行き着く。三年はかかる。私は髪を半分切って残そう。それで投げ縄を編んで獣を捕え、食糧として帰るがよい。私は急いで帰る。汝らの留守にクックマチャンに男の子が生まれた。その名はシビルの三界に聞こえている。地下界ではセンゴクチョン、中界では生まれて手袋にくるまれたココルドコン、上界では勇者の鳥に乗れるメングノニコン勇者。」乙女は数回まわると、ライチョウに変じて、羽音も高く飛び去る。

4. セカク姫の巻

デルゲルディン勇者とチャギルガン勇者の二人は小さな獣を投げ縄で捕まえては食べ、歩いて進む。途中、どこからか声がする。「キモ・キモ、キモニン！地下界のアヴァヒの頭、並み外れた勇者、四面のセレルグン・セヴェエンジャが妾を追いかけて三年にならんとす。わが甥の筋肉はいまだ固まらず、遅くなっていない。姉よ、男たちが来てくれるまでアヴァヒの頭をせめて一年だけでも遠ざけてもらえまいか。」セカク姫は髪の毛を数本抜いて 16 面体の木造の家の煙突に投げ込み、立ち上る煙に紛れて家にはいる。妹のダルペク美女が迎え出ると、幾度か回転して白鳥と化す。アヴァヒの頭目は驚となって白鳥を追いかける。

二人の勇者は家に帰着する。「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！我ら帰ったり。勇者の食事と勇者の衣を整えてください。」セカク姫は二人を迎え、333 頭のトナカイから 2 頭を選りすぐり、屠って食事の用意をするが、勇者は衰弱しすぎて、食べ得ない。セカク姫はあるとき 1 羽のカラスに「行って生命の水をもってきておくれ」と頼む。カラスは「カルデイル・カルデイル、カルデイルコイ！わしは生命の水のあるところを知っている。とても遠いところだ。最上等の去勢トナカイ 3 3 頭をくれるなら、持ってきて進ぜよう」と言って、日没の方角へ向かった。やがて、カラス爺さんが戻り、「カルデイル・カルデイル、カルデイルコイ！痩せ衰えた人を蘇らせる白い卵と病める関節を治す青い卵と力を回復させる赤い卵をもってきた。身体に塗り、飲ませて蘇生させるがよい。わしはひどく腹がへった。急いで、旨いトナカイを屠っておくれ。」セカク姫はトナカイを屠り、

その内臓を投げ与えた。卵で勇者を治した。二人は日に日に回復し、以前よりも立派な姿になった。⁵⁾

クックマチャンは吾が友と呼ぶべき中界のイルキスモンジャを思い出し、その骨を集め、関節に関節をつないで、鍛冶屋のトロンタイがつくった銅の揺りかごに入れ、赤い生命の水を塗って、骨をしっかりと縛り、その揺りかごを膝に抱え、揺らしながら、唱えた。「キドウ・キドウ、キドゥヤル！中界の勇者イルキスモンジャ、吾が友よ、吾が言うことを聴かれよ。吾は汝の友クックマチャン。かつて吾は健やかなカラムツの梢から根元まで重き詞で呪えしが、樹は枯れ死んだ。その枯れ木を根元から梢まで善き詞で寿げば、樹は甦りて緑のカラムツとなりき。黄色くなりし草を寿げば甦りて生き生きとした草となりき。生きた草を呪えば、枯れぬ。かくの如くに汝も死にたり。甦りのときは来たり。汝、眠つてあるなら、起きるべし。バユ、バユ、バユ―シュキ。吾が魔法の詞が真の力あるものならば、人となれよ。甦るものなら、とく蘇れ。汝には甦りを、吾には祝福を。」そう言うと、銅の揺りかごが三回転がって、三つに割れるように床に投げた。イルキスモンジャは自ら立ち上がり、これまでのように妻と息子に接吻をした。⁶⁾

アヴァヒの頭目に追われていたダルペク美女は力弱り、こう告げる。「エヴェル・エヴェル、エヴェリエ！ゲヴァン翁の娘たち、姉と妹よ、吾が甥、眼に光もつチャギルガン、上界の勇者デルゲルデイン、妾はようよう帰ってきたが、最期のときがきた。セレルグン・セヴェエンジャが追いつき、今にも妾を殺そうとしている。永久にさらば。」乙女は人の姿になって周囲の長さがキャンプを三回移動するほどの広い銅の野に出る。数回転してエゾイタチになり、穴を掘って、そこへ入る。アヴァヒの頭は人間の姿でそこへ追って入る。ダルペク美女は穴からでると、人間になり、アヴァヒと闘う。彼はダルペク美女を捕まえ、投げると彼女は三つに裂ける。アヴァヒはそれを喰らいはじめる。そこへチャギルガンが馳せ寄り、名乗りを挙げて、言う。

「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！我は汝の脊髓を人さし指で抜き出し、汝の鉄の骨を海の石の上に投げ散らし、氷の山で汝の鑄鉄づくりの頭でボール遊びをし、汝の血を天の虹に向けて飛び散らせ、もう一色増やすことにしよう。」アヴァヒの息子は聞こえる様子もなく、乙女を喰いつづける。チャギルガンが一発くらわすと、彼は言う。「ケングルドニン・ケングルドニン！我は地下界の唯一の王、ウルスの頭、四面のセレルグン・セヴェエンジャ王だ。汝の叔母のセカク姫を嫁にもらいにきた。」チャギルガンとアヴァヒの息子は格闘をはじめ、拳固で打ち合う。チャギルガンは力弱り、こう唱える。「ゴルデイル・ゴルデイル、ゴルデイルモイ！上界の太陽の息子よ、聞いてくれ、死のときがきた。疾くきて助けてくれ。」デルゲルデイン勇者は馳せ参じ、三つどもえの闘いになる。9昼夜休みなく闘う。デルゲルデインは弱り、唱える。「ギネ・ギネ、ギネカニン！今となっ

ては助けを求める相手がいない。クックマチャン、三界に名の聞こえた息子をよこしてはくれまいか。アヴァヒはまともに闘うことのできる相手ではない。」

クックマチャンは幼い子供を遣った。見れば、手袋ほどの大きさの子供が近づいてきて、呼ばわる。「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！眼に火をもつチャギルガン、兄よ、我は三つのシビルの地に完全な名をもつ者、地下界では鋭敏なセレルガン・センゴクチョン勇者、中界ではココルドコン、上界では勇者の鳥に乗れるメングノニコン。貴方がた、太陽の息子デルゲルデインよ、背はお高いが、お知恵は足らぬ。頭の中の脳みそは流れるほど軟らかそうだ。どこからも傷つきそうのない鑄鉄の勇者をどうして素手で打ち負かそうというのか。何のために頭を危険に曝し、徒に身体と血を捧げたのか。セカク姫、叔母よ、ゲヴァン翁の 110 プードの鑄鉄のボールをください。まずは、アヴァヒとボール遊びをしよう。」

セカク姫が父の 110 プードの鑄鉄のボールを捜しだす。ココルドコンは自分よりも大きなそのボールを闘いの野に一投げすると、アヴァヒの息子はそれを嘲笑い、「セカク姫と結婚して、地上の炉を破壊し、灰を吹き散らせる」という。ココルドコンはアヴァヒに「ボールを口で受け止めろ」という。アヴァヒが飛んできたボールを口で受け止めると、3 尋も後ろにのめくり、腰をつき、鉄の歯は錆びたつるはしのごとくに砕け、上歯は吞込み、下の歯は吐出した。次に、アヴァヒがボールを投げると、ココルドコンは両手でとる。「今度は我のように両手でとれ。」ココルドコンが前よりも強く投げると、アヴァヒは両手で受け止めたが、ボールは手から落ちて肝臓にぶつかり、それを二つに裂いた。アヴァヒは肝臓をげっぷで吐出し、一つは嚙んで吞込み、一つは吐出した。「ケンゲルドニン・ケンゲルドニン！今度は素手で格闘しよう。」ココルドコンは銅の鎧を着て、突進し、相手に殴りかかる。アヴァヒが打ってもココルドコンに当たらない。彼は小さいが、すばしこい。アヴァヒの息子は「これまでに 99 人の勇者を殺した。汝は 100 人目だが、汝は私よりも強い」と辞世を言う。ココルドコンはアヴァヒの遺体を分断して、四方八方に投捨てる。それから、家に向かって一部始終を宣べ、「勇者の衣と食事を用意してください。アヴァヒの頭に勝った祝宴をやろう」という。

太陽の息子デルゲルデイン勇者がセカク姫に求婚し、承諾される。盛大な婚礼の祝宴が始まる。おしゃべり、物語り、遊技がつづき、やがて、宴は終わり、客は去った。

5. ココルドコン勇者の巻

三日後の朝、ココルドコンがセカク姫に告げる。「キンッギル、キンッギル、キンッギルモイ！私はこれ以上は雄々しくはならない。遍歴に出ようと思う。何のためかと言えば、友のデルゲルデインは貴方と結婚した、地上のあらゆる生き物は番っている。私は一年目

は私に縫い物をしてくれ、二年目は主婦となり、三年目は私の運命となってくれるような女友だちをどこで見つけたらよいか。貴方は三年遍歴した。もしやして、どこかで見かけなかったか。遠路は厭わない。」セカク姫は答えていう。「キモ、キモ、キモニン！一人の娘を知っている。遠いところに上界に生まれた男、霧の空の息子のジュギルマンジャ勇者がいる。彼はいかに強剛な勇者であっても負かすことができない。まだ、汝が手袋の繻にいたころ、この男には針に化して、母親の針入れに隠した娘がいる。この娘だけが汝に相応しい。もし、汝が試練に耐えて、その父親の気に入ればよくしてくれよう。もし、そうでなければ、父親は汝に辛く当ろう。そう心得て出かけるがよい。」

ココルドコンは三度回転して白い鳥になり、上へ上った。「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！しかとは分からぬが、三年したら戻ってこよう。その間に何か異変があれば、どうか、風の便りにのせて欲しい。どこにしようとも、助けに戻る」と別れを宣べる。叔母のセカク姫は告げる。「キモ・キモ、キモニン！汝の行かんとするくには翼あるものは三回雛を孵し、四本足の獣は九回仔を産んでから辿りつく。汝、その姿で行かば、彼の父の気に入るまい。必ず、何かに変じて行くがよい。汝ら、もし、互いに気に入らず、闘いになれば、このシビルの三つの世界には何も残るまい。広き背が狭まり、長い知恵が短くなったら、魔術の詞を風にのせて運ばせよ。汝が何を言おうと、妾には聞こえよう。」

ココルドコンは白鳥になって八つの雲の間を抜け、九つ目の雲の下を飛んでいった。数多のくにを横切り、異郷を見た。こうしてどうやら上天の天辺に着いた。途中、眼下には海だけ、頭上には星空だけしか見えなかった。「空の息子ジュギルマンジャ勇者のくにだ」と思う。美しい野に霧が動き、そのなかから真の勇者と思しき、並外れたマタが走っている。近づいてくると、その明けの星のごとき目で射るように、宣べる。「キダ・キダ、キラジー！汝はどこの氏族の者か。幾つ年で、何者か。このくにには悪しき者、弱き者は来たことがない。汝もさぞや剛くかなりの強者であろうゆえ、来たのであろう。それにしても、汝は仮染めの姿であろう、本当のところは、それほど小さくはあるまい。我は上界の勇者、名はジュギルマンジャ、霧と蜃気楼の天の息子ぞ。汝急いで名乗られよ。そして、片足跳び、両足跳び、110 プードボールのゲームをやろう。」

ココルドコンは名乗り、娘のインモコン姫に求婚にきたことを伝え、ゲームに応じようという。「汝の父、中界のイルキスモンジャの誉れはよく聞いている、我ら、エヴェンキの勇者が出会ったのだ。なぜ、技試しをしたいかを話そう。このくにの外れに孤児として育ったアルバガイカン姫が二人の息子といる。そこへスムエンジャという手強い三面の勇者、地下界のアヴァヒがきて、彼らを幽閉し、トナカイを喰った後に喰おうとしている。私はそこへいくために力試しをしていた。汝もするがよい。それから、一緒にでかけよう。」ココルドコンはボール投げ、片足跳び、両足跳びをやって、相手に退けをとらないことを

知らしめる。ジュギルマンジャ勇者は彼を自宅に招じると、その妻、絹がかった髪のスルコンドルがもてなす。

両人は出発する。年長のジュギルマンジャ勇者は白銀のツルに、ココルドコンは白い鳥になり、長い間飛びつづけ、目的地に着くと、カラムツの樹皮に変身して、じっとアヴァヒの様子を窺った。アルバガイカン姫の下の息子がアヴァヒとやりあっている。アルバガイカン姫の下の息子デイルコヌコンはジュギルマンジャ勇者の来たことを感知し、兄に告げる。「デイン・デイン、デニカニン！兄よ、中界のチルケルケンよ、3 尋の槍で二人してアヴァヒを刺し殺そう、やり損なっても、ジュギルマンジャ勇者が助けてくれる。」しかし、アヴァヒは二人の槍を折る。弟はハエに変身して逃げ、兄は捕まって喰われそうになる。ジュギルマンジャ勇者が人間の姿になって、名乗りをあげ、アヴァヒに挑戦する。アヴァヒは名乗り、「人間を喰うためにきた」という。

ジュギルマンジャ勇者とアヴァヒの闘いは激しく、大地は荒らされ、生き物は逃げ出す。闘いは 6 ヶ月目にはいるが、双雄の闘いは一層熾烈さを増し、くにの荒廃が余りに凄まじいため、遠いくに偉大な町の王、エヴェンキの王が停戦を勧めるが、聞き入れない。次に若き乙女、太陽の娘キラチー姫が「デロゴイ・デロゴイ！闘いがつづけば、寿命が縮み、家畜も民も仆れてしまう、闘いを止めよ」と警告するが、両雄はなおも 3 月の間闘いつづける。次に太陽の上の娘、白髪の老女セメクシン姫が現われて、告げる。「ニミドリコ・ニミドリコ！地下界の勇者スムエンジャ、天の息子ジュギルマンジャ勇者よ、汝ら、驕るなかれ。植物を、幼き子らを、三界のシビル全体の数多の家畜を憐れみ給え。汝ら数多の悲しみをもたらした罪は重い。」両雄はそれにも耳をかさずに闘い続ける。

太陽の娘は大地の主霊に次のような魔法のこトバを送った。「ニミドリコ・ニミドリコ！闘いのために子供は生れ出ようとせず、家畜は殖えることができず、病気の子供は生き長らえず、弱き老人は死んでいく。この災難に手を打つときが来た。張本人の太陽の息子を罰してください。三年間、四角い銀卓にして、鳥や獣や人間が自由に食事ができるようにして下さい。それでこそ、彼の罪は償われる。地下界のアヴァヒ、恥知らずの盗人は生まれたときから人間を苦しめ殺しておる。しかも 99 人を喰らったと豪語しているからには、小さな罪はどれほど沢山犯していることか。奴を焼け焦げた切株にして丸 9 年の間放っておくがよい。傍を通るものは鳥も獣もそこに糞尿をかけるだろう。」そう言って、セメクシン姫は白い鳥に変じて上の世界へ飛び去った。両雄は相変わらず闘っていたが、そのとき、突如として、中界が雷のように轟きわたり、猛烈な嵐が吹き荒れ、大地が真ん中で口を開けた。両雄はその割れ目に落ち、顔の半分と片手が見えていたが、相変わらず、闘っていた。やがて、二人は真っ暗なくにへ落ちていった。

ココルドコンは闘いの様子を見ていたが、白い鳥となってジュギルマンジャ勇者のくに

へ向かって飛んでいった。すると誰かの声が聞こえる。「ゲロ・ゲロ、ゲロカニン！ああ、情けない、独りでいるときに、地下界のアヴァヒの頭目がやってきて、わたしを苦しめ、ひと月目の最後の夜になった。一人でも勇者がわたしの祈りを聞いて、助けてくれないものか。」ココルドコンは銅の野原に降りて、三回転して人間に戻る。「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！地下界のアヴァヒの王、四面のセヴェエンデよ、何ゆえにその若き乙女に勝てないでいるのか、さあ、闘いの野へ出て来い。」セヴェエンデはココルドコンを見て笑い出す。「キリモンデ・キリモンデ！こんな小さな童子が何と大口をたたくのか。おまえのボールが恐いものか。我の齒一本だって折れまい。さあ、投げてみろ。」ココルドコンは義兄ジュギルマンジャ勇者の 110 プードのボールを投げると、相手は鉄のつるはしのような齒で易々と受け止める。ココルドコンは、「ボールゲームだけで終わりではない。もう一つ、8 尋の 2 倍の弓で矢を射る。それを避けられたら、お前は本物の勇者だ。」ココルドコンは矢に呪文をかける。「友よ、8 尋の 2 倍の弓よ、我がこの世に生まれしよりの我が同伴者、私の言うことを聴いてくれ。もしも、我が三つのシビルの大地を遍歴し、家を持ち、家畜を増やし、子供をもうける定めならば、汝、鑄鉄を前にして止まるな。石からも逃げるな。アヴァヒの頭目のどこかの腱を貫け。」そう言って、力いっぱい弓を引くと、そのとき、アヴァヒの息子はどこからもってきたのか、鑄鉄の山の陰に隠れた。しかし、矢はそれにも怯まず、鑄鉄の山を貫き、アヴァヒの膝を打ち抜いた。アヴァヒは悲鳴をあげる。それから両者は決闘をはじめ、ココルドコンは相手を倒し、その遺体を切断して投げ棄てる。

それからジュギルマンジャ勇者の家へ帰り、「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！ソルコンドル姫よ、天の息子ジュギルマンジャ勇者は海の主霊が連れ去った。二年後には戻ってこよう。わたしはその間、くにへ戻ってこよう」と言う。ソルコンドル姫の調えた勇者の食事をしてしていると、四方から黒雲湧き上がり、白雲、赤雲が現われ、激しく行き交う。風に嵐、雨に雪、雷鳴に稲妻が襲い、すべてが過ぎ去って天が晴れると日没の方角、地下界から二人のアヴァヒ勇者が現れる。「ラヴィル・ラヴィル、ラヴィルドン！上界の勇者、天の息子、ジュギルマンジャ勇者、扉を開けよ。我らアヴァヒの勇者、吾が名は 33 サージェンの髪もつババヤガ、吾が弟の名は、大粒の霰の地に生れしブルンニユク勇者なり。何用できたかと問わば、汝の娘、糸のごとき足跡のインモコン姫を嫁にもらいにきた。」それを聞くと、家の女主人は「デグリ・デグリ、デグリモイ！」と猛烈に反駁し、ココルドコンに腕試しをするようにという。ココルドコンは闘いの野に飛び出し、ババヤガと闘う。ココルドコンは矮小なままでアヴァヒの攻撃を巧妙にかわし、しなやかな柳の枝でババヤガを散々打ちのめし、凍った土のなかへ 3 サージェンの深さまで押し込め、その喉をかつ切る。その辞世を聞きつけて、弟のアヴァヒ勇者がやってきて目を凝らして

相手を捜す。ココルドコンは闘いの野のこちらに立って、「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！地下界のアヴァヒ、ブルンニユク勇者、ボールを投げ合うか、弓でやり合うか、それとも素手で打ち合うか」と言う。アヴァヒは「グンギル・グンギル、グンギリエ！中界のココルドコン、アイの勇者よ、汝の背丈はツバメほどだが、考えは大胆だ。スズメほどだのに、豪壮な勇者とみえる。背はベニヒワほどだが、手強い。弓でやろうではないか、まず、年上の我からだ」と言う。そして、アヴァヒは足下の山を抜き、「鑄鉄の山になれ」と言って、それを自分の前に置く。ココルドコンはポケットから銀貨を出して、「銀の山になれ」と言い、それを前に置く。アヴァヒは矢に呪文をかけて、ココルドコンを狙うが、彼は飛んできた矢を手で掴みとる。アヴァヒも同じようにココルドコンの矢を手で掴む。かくて、勇者たちは格闘をはじめが、3昼夜して、闘いが熾烈になったとき、ココルドコンは相手に告げる。「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！この大地の木々や草を駄目にしてはならない、人や獣を脅すのは止めよう。天には我々にふさわしくにがある。そこには太陽の姉娘、セメクシン姫がいて、彼女は燃え盛る焚き火をおこしている。その火の上に回転する輪があり、それに小さな吊り輪がついている。そこへ行って闘おう。」そう言う、何回か身を翻して白い鳥となり、アヴァヒの頭目は同じようにして三つ頭の鷲となって飛翔した。天界の天辺に達したとき、ココルドコンはセメクシン姫に告げる。「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！中界の人々を不安がらせないよう、生まれてくる赤ん坊を脅さないように一人の勇者を貴方の輪へ連れてきた。火をおこして、輪を降ろして下さい。」それを聞くと、セメクシン姫は大急ぎで火をおこし、輪を下ろした。ココルドコンがその回転する輪に飛びつくと、それは人の姿が見えないほどの速さで回転した。彼はそっと地面に降りた。次にアヴァヒが飛びついて7回転すると、彼は耐えきれず、火のなかに落ちて、焼け焦げた。「グンギル、グンギル！熱い、熱い、何という業苦か。中界の勇者ココルドコンのなんと卑劣なことか、勇者を何と容易に殺すことか。この後、我が一族の誰も奴と闘うことはあるまい。このマタは敏捷な策略士だ。奴の姿はどうだ、イソツツジの陰からは見えもしないようなこの男をしてやることができないとは。熱い、熱い、死んでしまう。さらばだ。」ココルドコンは太陽の娘、セメクシン姫に感謝の詞を宣べ、別れを告げて、数回転して白い鳥になると、羽音も高くジュギルマンジャ勇者のくにを目指して飛ぶ。

天の息子のジュギルマンジャ勇者はまだ帰っていない。勇者の妻、ソルコンドル姫が迎え、ココルドコンをもてなす。そのときに、暗雲がかき起り、嵐になるが、それが止むと、「キダ・キダ、キラジー！」とジュギルマンジャ勇者が帰還する。そして、賑やかな食事がおわると、ジュギルマンジャ勇者はこう告げる。「中界のイルキスモンジャを父に、クックマチャンを母に、三つのシビルに完全な名をもつ我が婿、ここの世界ではメングニコ

ンという名の勇者よ、我々は二人ではじめて会って、技比べをした競技場へ出かけよう。私は昔やったこととお見せしよう、汝は今どれほど強いかを見せなさい。そうしてから、汝に妻をとらせよう。どうだ。」ココルドコンは喜んで、「出かけよう」という。家人は二人を見送ったが、その様子はたいへん滑稽だった。年上の勇者は腰骨が 4 指尺、脛の骨は 5 指尺、背中の幅は 6 指尺もある。その男と並んで手袋ほどの大きさの男がいく。彼らはあれこれ喋りながら、片足跳びを競った。格闘では、ココルドコンはいくら投げられても倒れなかった。ココルドコンはジュギルマンジャ勇者を少し振り回してから投げると、相手は仰向けに倒れた。「キダ・キダ、キラジー！かつて私は二本足のものに投げられて、倒れたことはない。汝は背丈ではなく、腕と足が強いのだ、それでアヴァヒを滅ぼすことができたのだ。それにしても、汝の背丈は本当にそれだけなのか。真の姿を見せてくれれば、嬉しいのだが。」ココルドコンは他言しないことを条件に、天に聳える禿山の天辺で、どこにもへこみのない銅鎧をつけたメングニコン勇者の姿を顕わした。ジュギルマンジャ勇者は並んで立った。相手は彼よりも指 4 本分背が高く、幅も指 4 本分広かった。ジュギルマンジャ勇者は納得して、娘の婿として「これ以上の勇者はいない」といって喜ぶ。彼らは白い鳥に化して帰宅する。そして、ココルドコンとインモコン姫との婚礼の祝宴が始まる。それが終わると、ココルドコンは暇を告げる。絹のごとき髪のスルコンドル美女は娘に胸飾り、金の指輪、財宝の詰まった箱を与え、はなむけの詞を贈り、旅装を整える。両親と互いに惜別の辞を述べて、ココルドコンはスルコンドル美女と故郷へ帰る。

6. 上界のフルコクチョン勇者の巻

二人を出迎えたのはココルドコンの従兄弟、太陽の息子デルゲルディン勇者とセカク姫の息子、上界のフルコクチョンであった。かくて、遠くからも、近くからも大勢の老若男女が参集し、賑やかな婚礼の祝宴が始まる。祝宴の後には跳躍の競技や力比べが行われるが、そこではココルドコンと上界のフルコクチョンに並ぶものはなかった。上界のフルコクチョンは言う。「私は善き若者がなすべき遍歴に出る時ではないだろうか。従兄弟のココルドコンは三つのシビルのすべてのくにを遍歴して善き伴侶を得てきた。私は何処へ遍歴すべきか、誰か教えてください。」これを聞くと、セカク姫は言った。「キモ・キモ、キモニン！水源のある大河の川上を上って、東に向かうと三つの支流がある。その真ん中の川を遡って上流まで行くと、もう一つの川がある。それを越えて行くと、川幅の大きな川に至り、それを渡ると、また、もっと大きな川にでる。その川の手前には澄んだ水が、真ん中には青絹色の水が、遠くには人間アイ⁷⁾の血の水が流れている。よく見ると、浮いているのは人間の腕や脚の骨、石は背骨だ。そのはるか先に美しい、まだ人が踏み入ったことのない草に被われた、異族の土地ではもっとも大きく、優れたくにがある。その主

人チヨルボンドル翁とオンノドル嬪に三人の娘があるが、その真ん中のウニャプトウク姫は人さし指ですべてを征服する。行って、彼女を求めなさい。」フルコクチョンは己の駿馬にうち乗り、大河を目指して疾駆する。

春夏秋冬を幾度か経て、彼はチヨルボンドル翁の、トナカイの群れに満ち満ちたくにに至る。そこへ斑トナカイの毛皮を着て斑トナカイに跨がった勇者がやってくる。「リルヴェ・リルヴェ、リルヴェヤ！我はチヨルボンドル翁の息子たちの召使い、ボカルドインだ。我らの娘を奪いにくるとは無礼千万、成敗してやる」と言う。襲ってきたこの勇者の杖を取り上げ、上界のフルコクチョンは一撃のもとにその脳天を打割って、捨てる。

この後、上界のフルコクチョンは主人のところへ行き、名乗りをあげて用向きを伝える。家の方から、重い足音がして、紛れもない勇者が現われ、「オクタニ・オクタニ、オクタネ！我の父はチヨルボンドル翁、母はオンノドル嬪、我が名はオタニ勇者、上界の勇者、アイの勇者なり」と名乗り、ボカルドインを殺された恨みを述べて、復讐を挑む。かくて、二人の勇者は決闘をはじめ、やがてオタニ勇者は弱り、フルコクチョンがその喉にナイフを当てようとするとき、彼は命乞いをする。その声にもう一人の勇者が現われる。「リングキル・リングキル、リングキリエ！」と名乗りはじめた勇者はオタニ勇者の兄弟、イレグクンデ。そこで、この勇者と上界のフルコクチョンの間で猛烈な闘いがはじまり、その互角の格闘は休みなく一年もつづいた。やがて、我がフルコクチョンが優勢となり、彼は相手の髪を三本の指に巻つけてその軀を立ち木に打つける。瀕死の勇者は「アイの人間はアイの人間を殺すべきではない。行って、我が妹、人さし指ですべてに打ち勝つ勇者、ウニャプトウク姫に自分で話すがい」と言う。上界のフルコクチョンはその言葉をもっともと思い、相手を助け起こす。

それから娘のところへ行って、「ウゲロ・ウゲロ、ウゲンドル！ウニャプトウク姫、扉を開けて、私の挨拶を受けてください」と言って、求婚する。すると、家からウニャプトウク姫が出てきて、「グレ・グレ、グレネ！」とフルコクチョンの詞に応えて、力比べを申し出る。彼女はフルコクチョンに掴まれた腕を振り払うと、海の方へ逃げ、海上に張り渡した針金を伝って、対岸へ渡った。我らがフルコクチョンはその後を追う。彼女が岩山に達し、針と化してそこの割れ目に入ると、フルコクチョンは鉄棒になってそれを追い、彼女が白鳥になると男は鷹に変じて天空の高みに追い、ついにそこへ至ると二人は人間に戻った。若き乙女はそこでフルコクチョンに力づくの闘いを挑み、「汝が勝てば、妾をとるがい、負ければ、妾の奴僕となろう」と言う。かくて、二人は凄まじい戦いをはじめるが、彼女はその兄たちよりも強かった。闘いは3ヶ月、90 昼夜つづき、ついに若き乙女は力尽き、死に瀕する。フルコクチョンが彼女を殺そうとするとき、乙女は彼を我に返らせる。フルコクチョンは彼女には何の非もないことを悟り、哀れみと悔悟の念にとらわれ

て、乙女を救ってくれるよう天に哀願する。

すると、五色の雲があらわれ、嵐がおこり、それと共に三羽の白鳥が舞い降り、3、4 回転すると乙女の姿になった。そして、言う。「キキル・キキル、キングキラニン！我が父は上界の、7 つ星に乗れるヘグレンドル翁、母はシヴェッキロン媼、妾は三つのシビル世界のすべてでどのような死も見逃さず、どのような不幸も歌で救い、死するものを息で甦らせる人間の救い主、善良なるシャマン、アヤクチャン美女なり。名をウニャプトウク姫というアイの乙女は死に、その身体は朽ちた。我が兄弟、フルコクチョンよ、何ということをそなたは仕出かしたのか。だが、そなたが己の罪を購い、過ちを正すことができるように、妾は天界から三つの卵をもってきた。それで乙女を癒しなさい。赤い卵は飲ませ、黄色い卵は骨に塗り、白い卵は身体に塗るがよい。」

フルコクチョンはかくて天の乙女を蘇生させ、シャマンに礼を述べ、己の馬を呼んで花嫁を獲得したことを伝える。二人は馬にうち乗り、乙女の両親の許へ天翔りゆき、結婚を伝え、帰郷の旅にのぼる。父親のチョルボンドル翁は風にのせて娘に祝福を贈る。故郷では母親のセカク姫が出迎え、かくて盛大な婚礼の祝宴が延々と行なわれる。饗宴の後に、皆は競技の広場に移り、そこでは徒競走、片足跳び、幅跳び、格闘、力比べなどの競技が行われたが、どの種目についても上界のフルコクチョンに適う者はいなかった。ただ一人互角の者がいたが、それは中界のフルコクチョンであった。

7. 中界のフルコクチョン勇者の巻

参列者が驚嘆した中界のフルコクチョンとは、ココルドコンとインモコン姫の息子、見事な勇者振りであった。婚礼の三日後に、彼は次のように宣べる。「ウゲレ・ウゲレ、デレゲイ！父よ、母よ、また従兄弟の上界のフルコクチョンよ、人さし指ですべてを征するウニャプトウク姫よ、私は大人になった。三つのシビルの世界を遍歴して花嫁をみつけてくる。いずれの方へ行けばよいのか、教えてください。」これに応えて、ウニャプトウク姫は言う。「グレ・グレ、グレネ！真直ぐ東へ行くと、三つのシビルの世界を七つの星にのって巡っているヘグレンドル翁とシヴェッキロン媼に七人娘があり、その末娘は優れたシャマンのアヤクチャン美女である。彼女は三つのシビル世界のあらゆる不幸を予見し、死者を甦らせ、どんな災難をも救うことができるように生まれてきた。そこまでは大変に遠い。翼ある鳥は9回雛を孵し、獣は9回仔を産むほどの時間がかかる。」

中界のフルコクチョンは感謝し、惜別の詞を宣べ、はなむけの詞に送られて出発する。彼の斑トナカイは天翔け、いく周りかの春夏秋冬をへてある断崖絶壁に達する。そこで斑トナカイは立ち止まり、人間の言葉で言う。「エングテヴロニン、エングテヴロニン！我が主人よ、これから先は私の行かれぬところ、一人で行くがよろしい。私はここで待つて

いよう。」中界のフルコクチョンは斑トナカイに別れを告げ、鷹に変身して崖の頂上を越えると、そこは天に連なるくにであった。人が足を踏み入れたことのないヘグレンドル翁のくには数多の肥えたさまざまなトナカイに溢れていた。見ると、家の周囲の草が萎れており、土埃のなかに四面の鉄、白い霧のなかに若い乙女が太鼓と撥を打ちながら廻っている。中界のフルコクチョンは人間の姿に戻る。彼が家の方に向かって、名乗りをあげ、求婚にきたことを告げると、白髪の老人が出てきて言う。「エイデギ・エイデギ、デギドル！地下界からアヴァヒの頭目が現れ、息子二人が闘ったが敗れた。今は娘が闘っている。行って、運を試すがよい。」

中界のフルコクチョンは闘いの場に行き、乙女に代わってその相手であるアヴァヒに挑戦する。アヴァヒはフルコクチョンの名を聞くと、言う。「デイングド・デイングド、デイングドニンデ！我が古の仇敵、狡猾なココルドコン若造の息子が現われたか。ココルドコンの憎き奴め！お前は、きっと、俺が家庭をもち、火を熾し、子供をもうけ、家畜を飼おうとするのを邪魔しにきたな。中界の勇者たちよ、汝らはとてつもなく邪悪だ。己が負けぬよう、汝の親父は『どのやり方で闘いをはじめようか』と言った。汝の親父、狡猾なココルドコンは燃え盛る火で俺を焼き殺した。今度はお前に負けるものか。拳の闘いをやろう」とすぐさま、鉄拳で打ち合いは始める。その闘いは90昼夜つづくが、その間、我らが勇者は隙を与えず、アヴァヒの攻撃を一度も受けない。すると、中界のフルコクチョンに向かってアヴァヒは「地下界の海の霧の中にある島の戦場」での闘いを挑み、自ら三回転してツルに変じて飛び去る。中界のフルコクチョンは白鳥になってそれを追ひ、日没の方角へ飛ぶ。その海上の島に着くと、アヴァヒは常人には居ることのできないような場所へ降り、そこで四面の灼熱の鉄と化し、煮えたぎる脂のなかで中界のフルコクチョンを待ち伏せた。彼は何も意に介さず、そこへ達して、人間の姿に戻る。危機を察したアヤクチャン美女は「ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！」と歌いはじめて、窮地のフルコクチョンを救出するため天界の鍛冶屋トロンタイに訴え、77 プードの槌と 33 プードのやっこを下賜してくれるように頼む。その詞が終わるや、彼女の太鼓の上に槌とやっこが降下する。アヤクチャンは黒雲にのって、闘いの場の上を廻りながら、それらをフルコクチョンに下ろす。こうして、フルコクチョンとアヤクチャンは力を合わせてアヴァヒを滅ぼし、岩の割れ目に閉じ込め、その岩を煮えたぎる脂のなかに突き落とす。

感謝と喜びを表し、婚礼をしようという中界のフルコクチョンに対して、アヤクチャン美女はアヴァヒの「生命の水」を我らが一族のために取ってこようと言い、シャマンの太鼓にフルコクチョンを乗せて、共に地下界の中央に達する。アヤクチャンは針と化して、岩の中に入り、そこからアヴァヒの「生命の水」を入用だけ太鼓で掬い、残りの水は呪文をかけてアヴァヒがいくら飲んでも効き目がないようにした。アヤクチャンは「生命の

水」のことを口外しないよう中界のフルコクチョンに口止めし、それから二人はそれぞれ黒雲に乗って、ヘグレンドル翁のくにへ帰る。そこで婚礼の宴が盛大に催される。

さて、いよいよ中界へ帰還するに当り、フルコクチョンは義父ヘグレンドル翁に、「その息子、亡くなった靄に乗りゆくタムナル勇者の骨を持参し、帰還の途中の適当な場所でシャマンのアヤクチャンが蘇生させる」ことの許しを求める。同意を得たフルコクチョンは、墓を掘らせ、タムナル勇者の棺をポケットにしまい、惜別の辞をのべ、そのなかで「携える勇者を甦えらせよう、彼は三年後にはここへ戻れよう」という。母親のシベッキロン嬬は「デゴ・デゴ、デゴニン！」と歌って、祝福とはなむけの詞を贈り、二人を見送る。中界の勇者はアヤクチャン美女と番のソデグロツルに変じて、出発する。

途中、上界と中界の境にある銀の峰に降り立つと、靄に乗りゆくタムナル勇者の骨を銀のゆりかごにいれ、関節を関節に合わせると、シャマンのアヤクチャン美女は宣べる。「ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！我が兄、タムナル勇者よ、勇敢なる勇者デリスとして再び生まれよ」と言って3回息を吸い、3回振り上げて揺りかごが3回転するように投げた。すると、勇者デリスが両足で立ちあらわれた。我に返ったデリスは「チピル・チピル、チピリヤ！」と歌って、感謝の詞を宣べる。中界のフルコクチョンは一部始終を話し、「この金の箱のなかには死から甦った者のための良薬がある、それを飲むように」と告げる。

かくて3人は共にココルドコンとインモコン姫の許へ帰還する。そこで盛大な婚礼祝いが催される。

8. デリス勇者の巻

その祝宴が終わると、デリスは上界のデルゲルデインに向かって、その娘のデルゴクチョン美女に求婚する。父親は娘の気持ち次第だと答える。デルゴクチョン美女が心を決めかねているのを知ったシャマンのアヤクチャンは「キキル・キキル、キングキラニン！」と歌って、デリスを弁護しながら、その勇者振りと幸運を確かめるための提案をする。「デルゴクチョン美女の人形を指ぬきの穴ほどに見える高さに吊るし、それを矢で射とめるがよい。」一同のものはこれに賛同する。そして、乙女の人形が天頂に紐で吊るされる。デリス勇者は己の弓矢に語りかけ、宿命の結婚を願かけて、満身の力を込めて弓を引く。矢は見事に人形を吊るしている紐の元を断つ。こうして、デリス勇者とデルゴクチョン美女の婚礼の祝宴がとり行われる。

シャマンのアヤクチャンはクックマチャン嬬に頼み、祖父、中界のイルキスモンジャと鍛冶屋トロンタイの遺骨を取り出すと、それを二つの銅の揺りかごに入れ、その揺りかごを身につけたシャマンの衣装のポケットにしまい、天に寄り掛かっている禿山の頂上へ昇った。そこで、「ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！エイケ・エト、エイケ・エト！」と歌い

はじめて、イルキスモンジャとトロンタイの名を呼び、甦って中界へ来るようにと乞う。かくて蘇生した二人の老人は「生命の水」を飲んで、25 才の若者となり、アヤクチャンに従って白鳥とツルに変わり祝宴に集まっている人々の元へ帰る。全員が打ち揃い、賑やかな祝宴がつづく。

そこで、2度生まれたデリス勇者は帰郷すべく皆に別れを告げ、花嫁と共に旅立つ。

こうして、中界の住人は「善きイルキスモンジャ」というエヴェンキのくにを統べ、あたかも海の水のように潤い満ち、牛はすべての川谷に溢れ、山の斜面は馬の群で黒ずみ、山々には数多のトナカイが走りまわっていた。中界の住人の一族はいく世代にもわたって殖え、その栄光はさまざまなくくに拡がり、その善き名は広く聞こえた。

9. エピローグ — ソルコクチョンの巻

その後、ココルドコンの娘ソルコクチョンには身体を鍛える頃になった。彼女は鍛冶屋のトロンタイに頼んで、禿山の頂上に銅を張った競技場をつくってもらい、そこで毎日鍛練に励む。あるとき天がかき曇り、一羽の鷹が飛来して、「ゴンッゴ・ゴンッゴ、ゴンッゴジ！私は雲を両親にもつ中界のデノル勇者」と名乗り、ココルドコンに向かって求婚を申し入れる。若き乙女は自らこの勇者に力試しを挑み、銅の競技場へ誘い、いとも容易く地界の海の底の島に放逐する。シャマンのアヤクチャンがそこからこの勇者を救出して、蘇生させ、くにへ還す。

それから、ソルコクチョンは鍛冶屋のトロンタイに「ヴィヴィル・ヴィヴィル、ヴィヴィリヤ！」と歌いはじめて、天穹を一周してここへ戻ってくるような 8 尋 2 つ分の弓を造ってくれるように頼む。トロンタイは何日もかけてそれを造る。乙女は毎日弓の練習をする。あるとき、射放った矢が戻ってくるとその穂先の根元に勇者の指の痕がついている。シャマンのアヤクチャンの助言にしたがって、もう一度矢を放つと、天からは別の銀の矢が落ちてくる。その矢を見た父親のココルドコンは娘に、「今度の勇者は善き者に違いなから、前のように無碍に退けないように」と忠告する。

それから三日後にシャマンのアヤクチャンはお産をする。生まれた男児は産声をあげるや、跳び起き、自らへその緒を引きちぎると父親フルコクチョンの頭上を跳び越えて銀の小鳥に変わり、空へ飛び出す。父親はツルに化してそれを追う。その途中で雲のなかに銀づくめの美丈夫が馬でやってくるのに出会う。両者は互いに名のり合い、フルコクチョンはその勇者が娘の婿になる勇者であることを認める。そして、銀の小鳥の息子に両親の素性を明らかにし、「銀の小鳥に乗れるデヌクチャン勇者」という名を与え、その運命にクロライチョウとオオライチョウの庇護があるようにとはなむける。

銀づくめの勇者、太陽デイラチャの息子モングンドル勇者はフルコクチョンに「ゲロ・

ゲロ、ゲロカニン！」と歌い、その妹ソルコクチョンへの結婚を申し入れる。そして、三日後に戻ることを約して去る。中界のフルコクチョンは帰宅して、アヤクチャンに息子をデヌクチャンと名づけたこと、名立たる勇者になろうことを告げる。彼女は息子の誕生祝いを盛大に催す。

その最中に嵐がおこり、稲妻が乙女の競技場を襲う。シャマンのアヤクチャンが白鳥になって急いで行ってみると、銀づくめの勇者がそこにいた。彼女の問いに答えて、そのモングンドル勇者は「ソルコクチョンへ求婚にきた」と告げ、互いに相応しい相手であるかどうかを技比べで確かめようと言う。アヤクチャンは帰ってくると、乙女に相応しい勇者が来訪したことを伝える。イルキスモンジャの一家は老いも若きも、男も女も、子供も召使いも皆がみな白鳥となり群をなして競技場へ向かう。そこでは最初に中界のココルドコンが、次にモングンドル勇者が詞を宣べ、それにつづいてソルコクチョン美女が言う。「ヴィヴィル・ヴィヴィル、ヴィヴィリヤ！私たちの運命は何によっても断ちがたい絆で結ばれている。」そうして、競技場に銀の矢を突き刺し、「ご覧なさい」という。一同がそばへ行ってみると、矢には我らが乙女の生き姿と、上界の勇者、モングンドル勇者の真の姿があった。今や、二人の幸福な未来を疑うものはいなかった。

盛大な婚礼の祝宴は 22 昼夜うち続いた。かくて、我らの中界は今日に至るまで事もなく存在しているのである。(了)

解説

テキストについて このテキストはロマノヴァ、ムイレエヴァ著『ヤクーチヤエヴェンキのフォークロア』(1971) [Романова и Мырсева 1971: 99-306] に所収されているが、前半はエヴェンキ語 (p.99-201)、後半がロシア語訳 (p. 202-306) で、いずれも散文の書き下し文である。上記の梗概はロシア語訳にもとづいている。録音テープは 18 時間に及ぶ。言語学者である著者たちは 1958、1960、1964 年にアルダン地区のトンモト川、ウチュル川流域のエヴェンキの言語調査を行った。この地域のエヴェンキでは大部分が日常語はヤクーチ語、若者層ではそれとロシア語を使っており、エヴェンキ語はわずかに年輩の人々が能くするところであった。トンモトよりはウチュル川地域のほうがエヴェンキ語が日常的にも用いられ、家庭では子供にも通用している度合いが高かったが、にもかかわらず、口承文芸の衰退は明らかであった。その、ただ独りの語り部が N. G.トロフィーモフであり、「イルキスモンジャ勇者」は彼の語ったものである。

トロフィーモフはブタ氏族であり、アルダン川上流のウチュル川流域のエヴェンキの狩人の家庭に生まれた。トロフィーモフ自身の話によると、彼がはじめて「イルキスモンジャ勇者」を聴いたのは 9 才のとき、S.ザボロツキー (ブタ氏族) の語りであった。10 才の

とき、夏になると子供たちだけで寝泊まりする小屋のなかで毎晩同年代の子供たちに語ってきかせた。あるとき、早朝にそれを聴いていた年寄りが、大人たちの前でそれを語るようにと説き伏せ、はじめて公に語ったのはわずか12才のとき、7晩連続であったという。爾来、トロフィーモフは頼まれれば、決して拒むことなく、お気に入りのこの「イルキスモンジャ勇者」を語った。1921年の大祖国戦争前に、彼はクタン川へ移ったが、その住人たちはエヴェンキ語を知らなかったのも、彼は祭日などには幾度となく公民館（クラブ）でこれをヤクート語で語った。こうして、20年ほどはエヴェンキ語で語ることがなかった。語りのなかにヤクート語の表現、イディオムなどが豊富なのはこのためであるという。すなわち、大部分の借用はエヴェンキの語り部によって創造的になされたわけで、そのため発音だけでなく、語意もまたヤクート語とは異なっているということになる。

テーマと構成 この叙事詩は長大ではあるが、全体のテーマは一貫して英雄の花嫁獲得である。そのための遠征で先着の求婚者、敵対者であるアヴァヒとの壮絶な闘いが行われ、また、花嫁の一族やその兄弟との力比べ（闘い）がある。後者の場合には闘いは求婚難題の一つのヴァリエーションとみなすことができようが、その目的は勇者の一族である花嫁にふさわしい勇者であることを証することにある。地下界の存在であるアヴァヒはそれ自身が地上界や天界の存在にとっては邪悪で相容れない敵対者である。それが地上界や天界へ闖入して結婚の相手を獲得しようとする。かくてアヴァヒは二重の意味で勇者にとって成敗すべき敵対者となるが、この叙事詩では全体を通じて、勇者たちがアヴァヒを相手に闘うのは、専ら花嫁となる乙女をめぐる敵対するのであって、文化英雄として地上界の安寧のために悪なる存在としてのアヴァヒを一掃するというわけではない。

全体の構成は小見出しに明らかなように、数多の勇者の花嫁獲得、花婿獲得の遠征武勇譚が独立した章段をなしている。タイトルになっているイルキスモンジャ勇者からはじまり、その姉妹、息子たちと姉妹の息子たち、孫とその世代の勇者というように3世代にわたる一族の勇者が各章段の主人公である。終章では中界のフルコクチョンに男児が生れるが、出生と同時に白き小鳥に化して飛翔し、勇壮な勇者になることが約されながらこの叙事詩の埒外におかれる。この一篇はなお未完であるらしいのはこの点にあるのかも知れない。この叙事詩の構成を見ると、明らかに全部で8つのエピソードが数珠つなぎに展開している。一篇は勇者と花嫁の婚礼の宴で終わり、そこに加わっている勇者の一人が次の段の主人公として登場、花嫁捜しの遠征に上り、アヴァヒとの闘いに巻き込まれるのが共通した筋である。

登場人物 登場人物のヒーローはいずれも「勇者」、ヒロインは「美女」かシャマンであ

る。イルキスモンジャ勇者と共に最初に登場する鍛冶屋のトロンタイは聾啞であるが、冒頭においてその彼が自らの手を打ち傷めて大声を上げるところから、この叙事詩はドラマティックに展開する。そしてこの鍛冶屋は全篇を通じてしばしば想起され、その所有する 77 プードの槌と 33 プードのやっところが勇者たちの窮地を救うために天から下賜され、また、第 7 章では死から蘇生したトロンタイが若き乙女のために銅の鍛練場と強弓をこしらえる。ヒロインはいずれも知性と果敢さをもった美女たちで、しかも、すぐれたシャマンである。なかでもクックマチャンはアヴァヒの女頭目と闘って死んだ夫イルキスモンジャを蘇生させ、セカク姫は死の世界に掠奪された未来の花婿と甥のチャギルガンを救出し、アヤクチャン美女は生ながらにして死の危険や死から人々を救出する使命を帯びているが、これまた未来の花婿と共にアヴァヒと闘い、地下界に降下して遂に「生命の水」を手にし、最後には死者たちを現世に甦らせる。女勇者として武技に長けているのは人さし指ですべてを滅ぼすというウニャントウク美女と銅張りの競技場で日々鍛練に励むソルコクチョン美女である。一方、地上界と天界の勇者たちに敵対するアヴァヒでは女頭目のババヤガがその弟のために花嫁を獲得すべく襲来し、勇者たちを苦しめる。彼女は 33 尋の針金の髪と鉄の爪をもって勇者たちの身体を苛み、ついには彼らをその領分である海上の遠く、地下界の孤島の煉獄に幽閉する。勇者は一樣に勇猛果敢であるが、この女アヴァヒにかかっては勝ち目がない。そのなかで傑出しているのは 3 つの世界でそれぞれ勇名を馳せるココルドコン勇者である。彼はクックマチャンとイルキスモンジャの息子であるが、その風貌は手袋ほどの大きさながら、祖父ゲヴァン翁の 110 プードの鑄鉄のボールをもって大人の勇者たちの適わぬ相手アヴァヒを滅ぼし、無策無謀な先輩たちの闘いを非難する。

リフレイン＝イケーフケ 登場する勇者とその他のものたちは対話の場面では必ず詞のはじめと終わりにリフレインを唱えている。勇者やヒロインばかりか、アヴァヒやカラスに至るまで、対話のはじめにはそれぞれ固有のリフレインを唱え、己が何者であるかを身上を明らかにし名のり、次に己がもの申す相手が何者であるかを同定し、最後に何の目的や用があるのかを宣べ、もう一度リフレインを唱っておわる。その口上に対して、相手も同じ順序で繰り返す。リフレインは登場者にそれぞれ一つ決まっているが、例外はシャマンのアヤクチャン美女で、彼女は普通の対話では「キキル・キキル、キングキラニン！」であるが、シャマンの儀式に際しては、「ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！」、また、死者を蘇生させるときには、「ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！エイケ・エト、エイケ・エト！」と唱っている。

本篇で登場するキャラクターとそのリフレインを以下に示す。

登場者（歌い手）	リフレイン
イルキスモンジャ勇者	ディイングドニ・ディイングドニ、デレゴイ
イルキスモンジャの妻クックマチャン	キドウ・キドウ、キドゥヤル！
イルキスモンジャの息子チャギルガン	ゴルディイル・ゴルディイル、コルディイルモ！
太陽の息子デルゲルディン	ギネ・ギネ、ギネカニン！
隻眼、隻手、隻脚のアヴァヒ、ホロン・デヴィル	デヴィル・デヴィル、デヴィリエ！
地下界の女主人ババヤガ	ラヴィル・ラヴィル、ラヴィルドン！
セカク姫	キモ・キモ、キモニン！
カラス	カルディム・カルディム、カルディムコイ！
ダルベク美女エ	エヴェル・エヴェル、エヴェリエ！
セレルグン・セヴェエンジャ（アヴァヒの頭目）	ケンゲルドニン・ケンゲルドニン！
ココルドコン勇者（中界での名）	キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ！
メングノニコン勇者（上界での名）	
セレルグン・センゴクチョン勇者（地下界での名）	
ジュギルマンジャ勇者	キダ・キダ、キラジー！
アルバガイカン姫の下の子ディルコヌコン	ディネ・ディネ、ディニカニン！
太陽の娘キラチー姫	デロゴイ・デロゴイ！
太陽の上の娘、白髪の老女セメクシン姫	ニミドリコ・ニミドリコ！
セヴェエンデ（アヴァヒの頭目）	キリモンデ・キリモンデ！
四面のセヴェエンデ（地下界のアヴァヒの王）	グンギル・グンギル！
上界のフルコクチョン	ウゲロ・ウゲロ、ウゲンドル！
ボカルドイン（チョルボンデル翁の息子たちの召使い）	リルヴェ・リルヴェ、リルヴェヤ！
オタニ勇者（チョルボンデル翁の息子）	オクタニ・オクタニ、オクタネ！
ウニャプトウク姫	グレ・グレ、グレネ！
イレグクンデ	リングキレ・リングキレ、リングキリエ！
中界のフルコクチョン	ウゲレ・ウゲレ、デレゲイ！
アヴァヒ	ディングド・ディングド、ディングドニンデ！
シベッキロン姫	デゴ・デゴ、デコニン！
シャマンのアヤクチャン美女	キキル・キキル、キングキラニン！
	ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！
	ヘデ・ホガイ、ヘデ・ホガイ！エイケ・エト、エイケ・エト！
ヘグレンドル翁	エイデギ・エイデギ、デギドル！
2度目に生まれたデリス（タムナル勇者）	チビル・チビル、チビリヤ！

ソルククチョン	ヴィヴィル・ヴィヴィル、ヴィヴィリヤ!
デノル勇者	ゴンッゴ・ゴンッゴ、ゴンッゴシ!
モングンドル勇者	ゲロ・ゲロ、ゲロカニン!

叙事詩的表現

エヴェンキの叙事詩には特有の表現があり、それはまた、語りの形式と深いかかわりがあるものと想像されるが、一方、このことは他の諸民族の叙事詩にもしばしば共通する顕著な特徴である。そのいくつかについて取り上げてみる。

1. 名をもっていること。

エヴェンキでは、サハの場合と同様に、叙事詩に登場するキャラクターはほとんど名をもち、直接話法では「歌い出し」のイケーフケに続いてそれを名乗る。しかも、自らの名の前に父親と母親の名を付して、素性を明らかにする。ココルドコン勇者が上界のジュギルマンジャ勇者と出会った折の、双方の科白は次のようである。

「キダ・キダ、キラジー! さても、さても、汝はいずこの氏族の者か、勇者よ、いずこからきたか。年は幾つで、誰の子か。...、挨拶を受けよ。我が勇名と広き誉れを問わらば、答えよう。『我は上界の勇者、名はジュギルマンジャ、霧と靄からなる天の息子だ。』それでは汝速やかに己の勇名と広き誉れを陳べよ。....」

そこで中界の我がココルドコンはすぐに話はじめて、次のように詳細を陳べる。

「キンッギル・キンッギル、キンッギルモイ! 上界の勇者、靄の煙りに包まれた天の息子ジュギルマンジャ勇者、まずは挨拶を、それから話を。『汝どこの氏族の生まれであるか』と問わらば、答えよう。『我が父は中界のイルキスモンジャ、母はクックマチャン美女、我は3つのシビルのすべてのくにに完全な名をもつ者、地下界ではセレルグンの接近で敏感に目覚めるセンゴクチョン、中界ではココルドコン、上界では勇者の鳥に乗れるメングノニコンとは我が名なり。』『汝、何用にてやってきたか』と問わらば、答えよう。『我はある意図もちて明るき名と広き誉れある汝の若き娘、糸のごとき足跡のインメコン美女の許へ、彼女が一年目には我が針子、二年目には主婦となり、三年目には我が運命の友となってくれるようにと飛んできた。』」

勇者の対話における直接話法の語調は概してこのように問答口調の形式をとることが多い。これも音声による伝達手段としては非常に明解で効果的であるように思われる。

2. 勇者の出現と天空の異変

天界からも、地下界からも何者かが中界へやってくるときには必ず天空に急激な大異変が起る。そして、その激しい嵐が止み、晴天が回復した時に勇者の館には何者かが鳥の姿

で舞い降りたり、鉄で被服された奇怪なアヴァヒが出現する。その有り様はあたかもオーケストラによるポリフォニーのフォルテッシモを想起させる。例えば、話の発端となるトロントイの怪我の後、上界からイルキスモンジャの妻とその姉妹が訪れてくる前兆は次のようである。

「夜明けに四方八方から風が吹きはじめ、黒き雲が押し寄せ、白き雲が現れた。彼（イルキスモンジャ）が見回す間もなく疾風が吹き出し、雷と稲妻が天を震わせ、地上に轟いた。稲妻はチュムを木っ端微塵にするやに思われた。豪雨が降り注ぎ、雪が降りしきった。風と雨が止んだとき、天からさえずりながら羽音とともに三羽の鳥が舞い降りた。」

このような描写は「イルキスモンジャ勇者」の篇だけでなく、エヴェンキの他の叙事詩にも共通しており、一般に勇者の移動は天地の鳴動を伴う。

3. 勇者振り

勇者の体格や服装についての描写は本篇では必ずしも詳細を極めないが、例えば、ココルドコンの矮小な姿が仮染めであることを気に留め、その花嫁となるインモコン姫の父、ジュギルマンジャ勇者は「本当の姿」を見たがる。このあたりの心理描写はこの章段の聴かせどころであるが、ココルドコンは数回転して、「どこにも凹みのない銅鎧を着けた上界の勇者メングノニコン」の真姿を顕わし、花嫁の父を満足させる。勇者振りはこの他にも食べっぷりや巨大な持ち物（弓矢、槌とやっこ、シャマンの太鼓と撥、重量のある鍔鉄のボールなど）に明示されるが、その表現は定型的であり、その定型句が絶えず反復される。

また、英雄叙事詩を通じて顕著な特徴の一つとして挙げられるのは勇者の怒りの表現である。怒りは表情だけに顕われる精神的心理的な昂揚ばかりではない。アヴァヒという存在に対する憎悪、理不尽な妄言や屈辱に対して湧き起る激しい憤怒は五臓六腑から全身に漲り英雄をして敵との対決に向かわしめる。それは道義や秩序、社会的な正義にとっての防護壁である。それが犯されそうになったとき怒りは爆発する。上界のフルコクチョンがアヴァヒと対決するときの怒りは次のように語られる。「憎悪のためにこの勇者の両のこめかみからは焰が燃え上がり、十本の指からは鮮血が迸り出て、両の肩は張り裂けんばかり、腰は破裂せんばかりであった。アヴァヒに近づくと、歯を軋ませて、告げる。…」

4. 闘いの表現

英雄叙事詩の一般的な特徴の一つに闘いの表現が仔細を極めることが挙げられる。闘いは素手で格闘によることが多く、主として、それが長期に及び、打ち合う音が天地にこだまし、大地は荒廃、草木は倒れ、人間も動物も幼きものは怯え、生まれ出ようとしないと

語られる。つまり、「イルキスモンジャ勇者」の一篇では、地下界の女主人ババヤガが針金の長髪や、鉄の爪で勇者を苛むという以外には、勇者同士、勇者とアヴァヒの闘いの生々しさや残酷さ、惨さ、痛みは如実に語れてはいない。また、アヴァヒとの闘いでは最終的に地下界や天界の特殊な装置のある、特別な場やに移されて決着することもある。英雄はアヴァヒの頸をはねて、その遺体を切断して四方に投棄するが、アヴァヒは勇者を喰おうとする。アヴァヒの襲来は中界や天界の嫁が目当てであるが、人喰いでもあり、エヴェンキの他の篇ではその一面が強調される例がある。敵対者の遺骸を互いにどのように処置するかという点も英雄叙事詩の重要な特徴であり、その背景に民族的な闘いの習俗や異なる民族、集団に対する見解をみてとることができる。

5. 特殊な武器

叙事詩にはさまざまな特殊装置や武器が登場するが、その一つに「呪的な矢」がある。コルドコンの章段では、アヴァヒの頭目との決闘に際して勇者は「友よ、8 尋の 2 倍の弓よ、我がこの世に生まれしよりの我が同伴者、私の言うことを聴けよ。もしも、我が三つのシビルの大地を遍歴し、家を持ち、家畜を増やし、子供をもうける定めならば、汝、鑄鉄を前にして止まるな。石からも逃げるな。アヴァヒの頭目のどこかの臍を貫け」と呪文をかける。矢はそれを実現する。また、デリスの章段ではその矢がデルゴクチョンとの結婚の成否を賭けて放たれる。そして呪文をかけられた矢はあたかも意志のある生き物のごとくに忠実に使命を果たす。「呪的な矢」はユーラシアの英雄叙事詩に広く登場し一般に共通する特徴の一つで、さまざまな習俗や儀礼とかかわっている。

6. 鳥への変身

勇者たちは幾度が身を翻し鳥に変身して空を移動し、また、身を翻して人間の姿に戻る。これは中界や上界の勇者ばかりでなく、地下界のアヴァヒの勇者も同様である。鳥は白鳥、ツル、銀ツル、ワシ、タカなどである。天空を飛翔する鳥への変身は何も英雄叙事詩だけに固有の表象ではなく、他のジャンルの説話にも一般的であり、また、それはユーラシアばかりでなく、人類の普遍的な夢想であったし、今日でも変わらない。ただ、このような鳥の出現がエヴェンキの叙事詩では天空の急激な異変を前兆としていることに特徴があり、また、それはサハの叙事詩についても等しく共通している。「イルキスモンジャ勇者」の篇では、鳥の他に、針、シラカバ樹皮、ハエなどへの変身や、変身逃走などのモチーフもみられる。

注釈

¹ ヴァシレヴィッチはシビルを「土地」や「種族」の名称であるとし、叙事詩に登場する3つのシビルを具体的な地名に比定し、また、民族名として「シバイ」（室韃）を想定している[Василевич 1966:338-339]。

² 叙事詩のなかではエヴェンキはしばしば自らを「ウランカイ」と称している。これは「山岳森林の住人」の意で、叙事詩のなかではシビルの地の山のタイガで、家畜をもたずに放浪生活をしていた狩猟民であるという[Василевич 1966:340]。

³ プードはロシアの古い重量単位、1 プードは40 フントで約16.38 キログラム。叙事詩のなかでロシアの度量衡の単位が用いられるのは一般的な傾向である。後出のババヤガの髪は33 サージェンであるが、これもロシアの長さの単位である。

⁴ アヴァヒは「敵」のことで、サハ語に由来する。サハの叙事詩では勇者に敵対するのはabaahyで地下界の住人、邪悪な怪物である。エヴェンキの叙事詩にアヴァヒが登場するのは、サハとの歴史的なかわりや、エヴェンキにサハ語やオロンホが通用していたことを窺わせる。

⁵ ここでは「生命の水」が明確ではない。使われたのは白、青、赤の3つの卵である。この卵は第6段「上界フルコクチョンの巻」でアヤクチャン美女がウニャプトウク姫を甦生させるときにも使われる。卵は生命力の源泉、肉体の治癒力をもつものとみなされている。

一方、「生命の水」はこの後でも触れられ、また、第8段「中界のフルコクチョンの巻」に登場する。それは地下界のアヴァヒの所有するところで、地下界の中央の岩の割れ目にあり、彼らが死から甦る手段である。それをシャマンのアヤクチャンが中界の同胞エヴェンキのために獲得し、残りの水は効果なきものにして、アヴァヒの甦生の可能性を断つ。

⁶ シャマンが死者の骨をつなぎ合わせ、銅の揺りかごに納めて、揺らしながら、詞をかけ、最後に投げ出すという甦生法は、第7段と第8段でも繰り返される。「揺りかご」で「揺らす」という行為には大きな呪術的な意味があるようで、これはエヴェンキのみならず、ユーラシアの他の民族にも見られる。

⁷ 「アイー」（айыы）とはヤクート語で善なるもの、善なる存在を意味し、中界や天上界の住人、アヴァヒと闘う勇者をさす[Эмельянов, Лебедева 1990: 384]。

参考文献

金成まつ・金田一京助

1959～75『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』I-IX 三省堂

久保寺逸彦

1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店

大林太良

1991「アイヌのユーカラとその歴史的背景」『北方の民族と文化』山川出版社

荻原眞子

1989「ニヴヒ族の英雄説話」『民族接触』六興出版

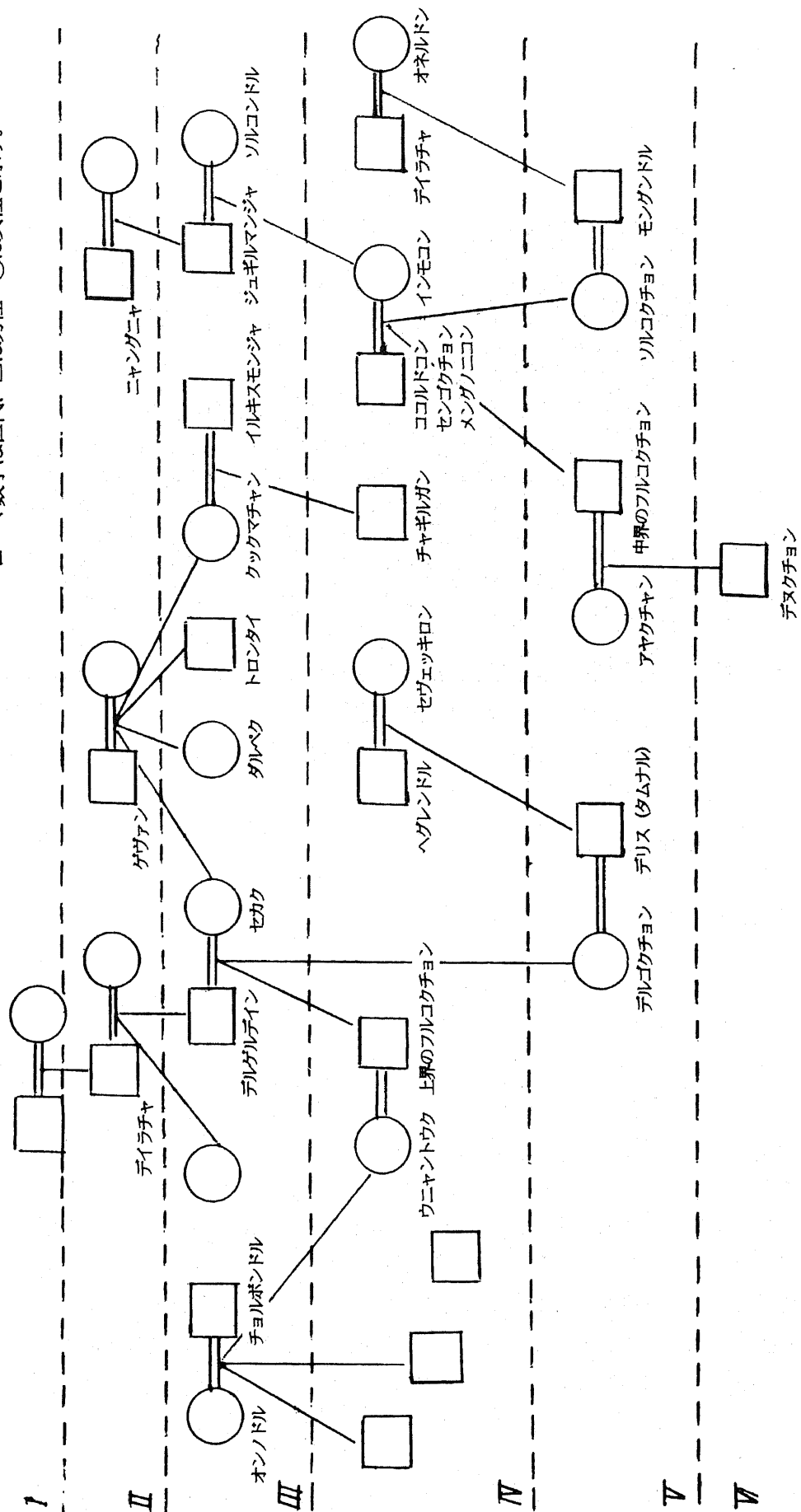
1990「鉄人とシャマン—神話から英雄説話へ」（阿部年晴、伊東亜人、荻原眞子編）『民族文化の世界（上）—儀礼と伝承の民族誌—』小学館

1994「メルゲンとプジの物語—ナーナイの“英雄叙事詩”」『口承文芸研究』第17号

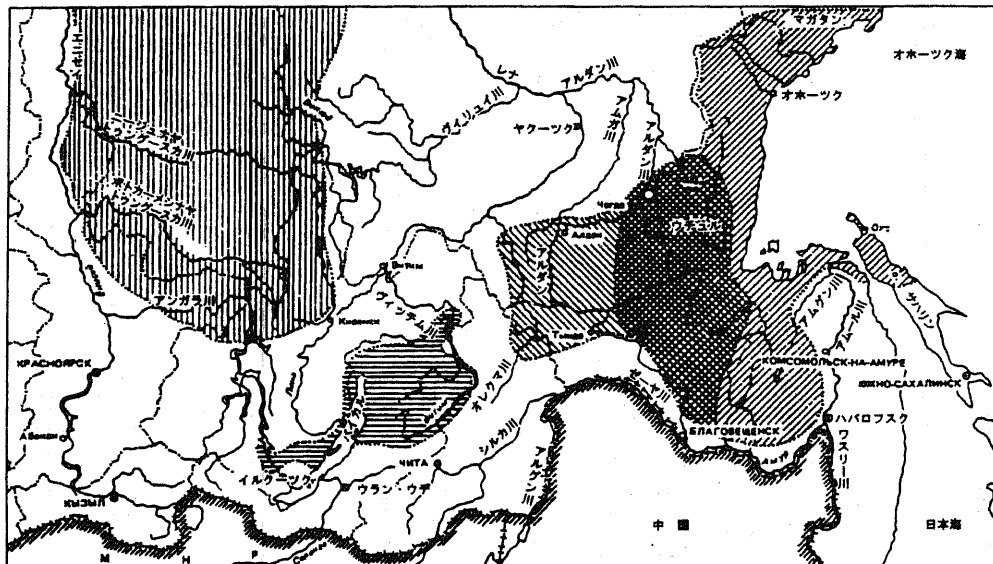
- 1995 『東北アジアの神話・伝説』 東方書店
- 1996 『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』 草風館
- 1997 「(資料) エヴェンキの英雄説話の2つのテキスト」『北海道北方民族博物館研究紀要』第6号
- 斉藤君子
- 1988 「ツングース系民族の語り」『口承文芸研究』第11号
- Булатова Н.Я.
- 1987 *Говоры эвенков Амурской области.* Л.
- Василевич Г. М.
- 1936 *Материалы по эвенкийскому(тунгусскому) фольклору.* Л.
- 1966 *Исторический фольклор эвенков: сказания и предания.* М.-Л.
- 1969 *Эвенки: историко-этнографические очерки(XVII- начало XX в.).* Л.
- 1971 *Дошаманские и шаманские верования эвенков. Советская Этнография, №5*
(小川眞子訳「エヴェンキ族のプレ=シャマニズムとシャマニズム」I,II,『柳田国男研究』2,3号)
- Воскобойников М. Г.
- 1958 *Фольклор эвенков Бурятии.* Улан-Удэ
- 1960 *Эвенкийский фольклор.* Л.
- (Georgi Joh. Gottl.
- 1775 *Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich im Jahre 1772 von Joh. Gottl. Georgi.*
Erster Band. SPb)
- Мыреева А.Н.
- 1990 (комментария)Эвенкийские героические сказания. (Эмельянов Н.В., Лебедева Е.П.
1990: p. 72-89)
- Орус-оол С.М.
- 1997 “Тувинские героические сказания”, *Тувинские героические сказания(Памятники фольклора народов Сибири и Дальнего Востока 12)*, Новосибирск
- Романова А.В. и Мыреева А.Н.
- 1971 *Фольклор эвенков Якутии.* Л
- Эмельянов Н.В., Лебедева Е.П.
- 1990 *Эвенкийские героические сказания - Храбрый содани-богатырь, Всесильный богатырь Дэвэлчэн в расшитой-разукрашенной одежде. (Памятники фольклора народов Сибири и Дальнего Востока)*, Новосибирск

叙事詩「イルキスモンジャ勇者」に登場する人物の婚姻関係

ローマ数字は世代、□は男性 ○は女性を示す。



エヴェンキの英雄叙事詩の分布



1 2 3 4 5

[Myreeva 1990 : 76の図を改変]

東部タイプ (1.極東エヴェンキ、2.上アルダン・ゼーヤエヴェンキ、3.本篇の分布地域)

北方タイプ (4.)

南方タイプ (5.)